

森岡正博全集第一六巻

引き裂かれた生命

画面閲覧用PDF

第八章くあとがき

* 画面で閲覧するのに最適のレイアウトです。

* 無料でごらんになれます。

* パソコンのハードディスクに保存すれば、電話線を切ってから、ゆっくり画面でお読みいただけます。そのほうが快適に読めます。

* 印刷や、テキストの抜き出しはできません。

* 印刷したり、ページ番号を確認するためには、目次に戻って、印刷用PDFを入手してください。少ない枚数で書籍のように美しく印刷できます。

目次に戻る

森岡正博全集に戻る

第八章

社会のなかで人間たちが助け合いを行なうとき、それは往々にして 権力支配関係込みのささえあい となる。そしてそのような権力支配関係がもつとも極端になるとき、そこには、集団の主要部分の生き残りのために、足手まといとなるものを切り捨てていくという形のささえあいが立ちあらわれてくるのであった。このようなささえあいは、すべての成員を等しいものとしては扱わない。だから、いま目の前で困っている者を助けてあげたいと思う「ささえの本性」は、そのような切り捨てに反発し、権力支配関係込みのささえあいから排除された人たちに、思わず手をさしのべてしまう。そして、そういう犠牲者を出す社会をおかしいと思ひ、なんとかしなければならぬと考える。

そのような平等への志向をもつように見える「ささえの本性」が、しかし別の場面では目の前の他者を抑圧し、自由を殺し、極端な場合には死にまで追いやってしまうことがある。そのメカニズムを解明しなければならぬ。

「ささえの本性」とは、困っていたり、助けを求めていたりする者を、助けてあげたい、ささえてあげたいと思い、行動してしまふ本性であつた。たとえば、道端で苦しんで助けを求めている人がいたときに、その前を無視して通り過ぎるのではなく、その人のところに駆けつけて声をかけ、その人の身体をささえてベンチにまで運んであげるということを我々はするかもしれない。そのとき、そこに「ささえの本性」が働いている。

しかし、このようなささえの行為が、かならずしも助けられた当人の意に添わないことがある。たとえば、自動販売機の前でコインを持って当惑している人を見て、使い方が分からなくて困っているのだと思つて、思わず声をかけて使い方を教えてあげたのだが、その人は不機嫌そうな顔をしてお礼も言わなかつたというケースを考えてみよう。この場合、その人はたしかに自動販売機の使い方が分からなかつたのだが、でも、それをあくまで自分ひとりで説明しようとしていたのかもしれない。そこに突然、横から口出しされたものだから、「自分で説明したい」というその人の気持ちがあつたのだ。

「ささえの本性」にもつづいた行為というのは、「このように」いらぬおせっかい」を生み出すことがある。困っている人のためになると思つてしてあげたのに、逆効果になつてしまふわけだ。

いらぬおせつかいをして、相手が不機嫌になったというぐらいならばまだいいのだが、いらぬおせつかいのせいで相手の人生を狂わせてしまったり、相手に深刻な打撃を与えてしまったりすることもある。末期ガンで苦しんでいる人を見て、こんなに苦しいのなら死んでしまったほうが楽だろうと思ひ、その人を助けるつもりで薬物を注射して殺してしまつたという事件があつた。もし、この場合、患者が最後まで病氣と闘いたかつたのだとしたらどうだろうか。苦しむ人を助けてあげたいという「ささえの本性」から出た行為であつても、それが苦しむ人をさらにいっそう苦しめたかもしれない。

この点は、倫理学では「パターナリズム」の問題として論じられてきた。

パターナリズムとは、ちょうど父親が子どもや家族のことを思つて、彼らのことを決めてしまふような状況を指している。たとえば私が、小学生になつた子どもをみて、いまは遊びざかりだが、この子の将来のことを考えると私立中学校に入つたほうが絶対にいいから、いくら本人がいやがつても進学塾にやろうと思つて子どもを塾に入れるとき、私の行為はパターナリズムとなつてゐるのである。

親が、自分の利益だけを考へて子どもを塾にやるとか、あるい

は子どもを苦しめようと思つて塾にやる場合は、パターンリズムとは呼ばない。それは、単なるエゴイステイックな強制にすぎない。あくまで、親が、子どもの将来のことを親身になつて考えて、その子のためになるからこそ塾にやろうとするときに、はじめてパターンリズムとなるのだ。

ビーチヤムとチルドレスは、パターンリズムのふたつの特徴をあげている。それは(1)親が 子どもの利益を思つて 行為すること、(2) 決定の少なくとも一部を、子ども本人にさせるのではなく、親がしてしまうこと、の二点である(『生命医学倫理』成文堂二五三頁)。子どもの将来を思つて塾にやることは、この意味で、典型的なパターンリズムである。すなわち、親は子ども本人の利益のことを思っているわけだし、親がいやがる子どもを説得して、塾に行くことを強制しているからである。

このようなパターンリズムは、なにも親と子どものあいだにだけ生じるわけではない。たとえば医師と患者のあいだにも生じ、し、夫と妻のあいだにも生じるし、国家と個人のあいだにも生じる。たとえば医師が、患者にガン告知をするかどうかを決めなければならぬケースを考えてみよう。「告知をすれば患者は精神的にまいってしまつて不幸な最期を送るだろう」と医師が判断し、患者のためを思つて告知をひかえた場合、それはパターンリズム

となる。あるいは妻が外に出て働きたいと言っているときに、世間を知らない妻が社会に出たら心身ともに大きなダメージを受けるから出ないほうがいいと判断して、妻を外に出さないとき、それはパターナリズムとなる。あるいは、車に乗るときに事故にあつてはいけないからシートベルトの着用を法律で義務づけようとするとき、それは国家による個人へのパターナリズムと呼ばれることがある。

このように、パターナリズムとは、力関係で言えば「強者」の側が、より「弱者」に対して行なう行為であると言える。力の強い者が、力の弱い者のために思って、その人生をいい方向に導いてあげようとするときに、それは出現してくる。

苦しんでいる者を助けてあげたいと思い、行動してしまう「ささえの本性」と、この「パターナリズム」とは深い関係にある。このふたつは同一ではないのだけでも、それがエゴイズムではなく相手のことを思つての行為だという点はよく似ている。そして、相手のことを思つてするのだが、しかしながら結果的には相手から不満と非難を浴びせられる危険性をはらんでいるという点も共有している。そのあたりを探るために、パターナリズムについてもう少し詳しくわしく見てみることにしたい。

パターナリズムについての倫理学の議論は、我々が住んでいる自由主義の社会において、パターナリスティックな制限がいったいどこまで正当化できるのかということをめぐつてなされてきた。

一方においては、個人の自律と自己決定を最大限に認めるべきだとする立場がある。それによれば、相手のために思ってなにかを強制したり代理決定したりすることは、つつしむべきこととなる。相手がいくら精神的に動揺すると思っても、それを理由に情報を与えないということとしてはならない。シートベルトの着用を義務づけるのも、シートベルトなしで運転したいという自由意思の侵害である。個人は、自分で情報を得て自分で決定することを最大限に保障される。そのかわりに、もしガン告知を受けて精神的に混乱したとしても、それはその人の自己責任であるし、シートベルトなしで運転して大事故にあってもその人の自己責任である（賠償も含めて）。そのときに、医師や国を訴えるのは筋違いである。

これに対して、理性的な根拠のあるパターンナリズムは、いくら相手がいやがっていたとしても正当化されるのだという考え方がある。たとえば、シートベルトをして運転するのはいやだと言っている人がいたとしても、その人は理性的に充分考えていないからそういうふうにするのであって、もし交通事故にあつたらどうなるのかとか、シートベルトによつてどのくらい危険が少なくなるのかとか、もし大事故にあつたら家族はどうなるのかとか、そういうことをその相手が慎重に理性的に考えたするならば、その人はシートベルト着用という結論に導かれるはずだ。だから、シートベルトをしなさいというパターンナリズムは正当化される。あるいは、子どもを塾にやるという例でも、もしその子どもが大人になつたとしたら、親が自分を塾に入れてくれたことを感謝し、それに同意するだろう。だから、いまはいやがっていたとしても、塾に入れることは正当化できる。そういうふうを考える。ただし、この立場でも、すべての介入を正当化できると言っているわけではない。たとえば異様な体罰を与えるような塾に行かせるとか、そういうことはやってはならない。

このような両極端のあいだのどこかで、我々はパターンナリズムを正当化しないといけないのである。というのも、すべてのパターンナリズムを排するとすれば、そもそも医療や教育は成立しなく

なるし、社会秩序は保たれなくなる。しかし逆にパターナリズムを認めすぎると、個人の自由と自己決定が不当に抑圧される社会が来てしまう。

この種の問題が具体的かつラディカルに出てくるのが、医療の現場である。たとえば、高熱を出して点滴を受けている患者が自分の点滴の針をはずしたときに、看護婦はどうすべきか。看護婦は、その針を患者の意志に反してふたたび腕に刺すのか、あるいは患者の意向を重視して点滴をはずしたままにしておくのか、あるいは患者に点滴の必要性を説得するのか、すぐにその場で決断しないといけない。患者と話をしようにも、患者は高熱でしゃべれないかもしれない。そういうときにどうすればいいのか。針をふたたび強制的に刺すとすれば、それこそパターナリズムである。しかし患者は、針を刺されて不快になるくらいなら、死んだほうがましだと思っっているかもしれない。

このようなパターナリズムは、一般的には、正当化されるとみなされている。というのも、緊急事態における救命措置は、医療倫理ではとりあえず正当化されることが多いからだ。というのも、そこを疑ってしまうと、医療行為それ自体の根幹が崩れてしまうからだ。問題となるのは、この患者に明瞭な意識が戻ってきたときに、それでも繰り返し繰り返し点滴の針をはずす場合である。

そして、患者と話をしてみると、針を抜く理由を明快に答えたとする。そのときに、それでも点滴を強要するという「パターナリズム」が正当化されるのかどうかは、微妙な問題となる。

もしも、そのようなパターナリズムは正当化できないと考える人がいたら、では、次のような例を考えてみてほしい。これは、ビーチャムとチルドレスが『生命医学倫理』で引用している例である（二五七、四九七頁）。一二七歳のある男性患者は精神病院に収容されていたが、かつて退院したときに自分の右目を摘出し、次に退院したときには右腕を切断した。彼は自分の宗教的信仰によってそれをしたと言っている。つまり、自分は預言者であり、「神の直接命令」に従って右目を摘出し、右腕を切断したのだと主張したのだ。

彼はいま「神の子どもたちにたいする神の愛を実行する」ために、病院から解放されたいと思っている。彼は、「もし神がそうせよといわれるなら、私は自分の右足を切断するであろう」と言っている。

このときに、我々は彼の希望どおり、彼を退院させるべきであろうか。それとも、彼のためを思って、パターナリズムにふるまい、病院のなかで彼を監視し続けるべきであろうか。

たぶん、このケースを目の前にしたときに、彼がそう言うのだ

から彼のしたいようにさせてあげればいいと判断する人は少ないのではないだろうか。多くの人は、彼を退院させないでうまくおさめる方法がないのかとか、あるいは仮に退院させたとしても、彼に自傷行為をさせないように監視するべきだとか思うのではないだろうか。これはどちらもパターナリズムである。だとすると、そのパターナリズムは、どういう根拠によって正当化されるのか。ひとつは、前にも述べたように、この人は理性を正しく使う能力を失っているのでそのようなことを言うのであり、理性を持っている我々がかわりに決定してあげるべきだという考え方である。もし彼にいつの日か理性が戻ってくれば、その決定に同意するだろうというわけだ。

もうひとつは、ビーチヤムとチルドレスが示唆している見解なのだが、もし仮に彼が理性を充分に持っていたとしても、彼を退院させることは彼を幸福にさせることにはつながらないから、彼を退院させないというパターナリズムは正当化できるという考え方だ（二六三頁）。

そうは言っても、なにが「理性的」なのかはいちがいに決められないし、なにが彼の「幸福」なのかもまたいちがいには決められない。だから、この事例においてパターナリズムが正当化されているとは私は思わない。しかしながら、実際の場面では、たぶ

んこの種のパターンリズムは、人々の「良識」の名のもとに、特別の反対なく実行されていくにちがいない。

だから、おそらく問題は、パターンリズムが厳密には正当化されない場面であつても、その行為が実際には実行されてしまうという我々の社会の現実を、どのように考えればいいのかということころにあるのではないだろうか。このあたりは、生命倫理学の古典的教科書と目される『生命医学倫理』を読んでいて、いつも不満に思う点だ。

パターンリズムが議論されるときに、かならず引き合いに出されるのが、麻薬を服用している場合と、自殺の場合である。

たとえば、麻薬やLSDを服用して自分を傷つけようとしている人がいたときに、その人を救助するというパターンリズムは正当化されるかどうか。あるいは、麻薬に溺れている人が、麻薬を求めてきたときに、医師はそれを渡すべきかどうか。これらの場合は、麻薬を服用しているからその人には正常な理性的判断ができないので、パターンリズムは正当化されるとみなされるのが普通であろう。

では、自殺をしようとしている人がいたときに、それを強制的にやめさせるパターンリズムはどのようなのだろうか。大人が自殺しようとしているときに、それをやめさせる根拠はなにだろうか。

まず、目の前で自殺しようとしている人がいたときには、とりあえず「緊急避難」としてそれを止めることが正当化されるように思われる。なぜかと言えば、ひとつは、そのときにその人が正常な精神状態ではないかもしれないという理由である。あとで冷静になって考えてみれば、自殺しなくてよかつたと思うかもしれない。もうひとつは、自殺したいという思いは、往々にして、いまのこの苦しい状況から逃げたいということなのであって、その苦しみをさえ取り除いてやれば、ほんとうは生き続けていたいのかもしれないという理由である。

だから、自殺したいと言っている人や、自殺しようとしている人がいたときには、それを緊急避難的にやめさせるパターンリズムは基本的には正当化されるのではないだろうか。

しかしながら難しいのは、その人と長い時間をかけて何度も冷静かつ理性的に話し合ったとしても、その人が明確な根拠でもって自殺をしたいという意見を変えないとき、我々はその人の自殺をやめさせることができるかという問題だ。私は、そういう場合には自殺をやめさせるパターンリズムは正当化できないのではないのかと思っている。家族や親しい人々が悲しみにくれるということを理解したうえで、でも自殺したいとその人が決断するとき、それをやめさせる根拠は我々にはないのでないか。

しかし、その人の自殺を積極的に幫助することまで許されるのかというと、それはまた別の問題である。たとえば、その人に毒薬を与えていいのかといわれれば、それは自殺幫助あるいは囑託殺人となってしまうわけで、刑法の罪に問われる。医学的に見て末期状態の患者に対しては、特例として、医師による自殺幫助（積極的安楽死）を認めようという運動があるが、それを合法とする国はほとんどない。アメリカでは、キボキアンという医師が、自殺装置を作成して患者に与え、自分で死んでもらうということを実行し続けていて、社会的な問題になっている。アメリカの連邦最高裁は、末期患者の自殺幫助は許されないという判決を下した（九七年六月二六日）。いったん自殺幫助を認めてしまうと、強制的な殺人を自殺とみせかけてしまうケースが起きる危険性があるからだ。

自殺しようとしている人に、我々がどこまでパターンナリストイックに介入してよいかという問題は、きわめて難しい。私自身は、自殺幫助は許されないが、かといって、本人が納得づくで自分の力で死んでいくのをやめさせる権利は我々にはないと思う。しかしながら、目の前で親しい人や愛している人が自殺する場合、我々はそれを強制的にやめさせようとするのであり、その場合、我々は正当化されないパターンナリズムを行使しているのである。

「我々が正当化されないパターンリズムを行使するとき」とは、いったい何なのかという大問題に、私はいま直面している。これは、生命倫理学ではけっして把握できない問いであり、まさに「生命学」の問いなのである。

パターンリズムは、さらに経済的問題とも関連している。たとえば、国家が個人にシートベルト着用を義務づけるというパターンリズムは、その人のためを思っており、同時に、事故が起きて重症になった場合の医療費の公費支出をなるべく押さえたいという経済的な理由からも出ているのだ。このあたりも、見逃すことができない。

3 「愛」という名の支配

倫理学におけるパターンリズムの議論は、「どのような種類のパターンリズムがどのようなようにして正当化されるか」という点にもっぱら集中してきた。それはもちろん大事なことなのだが、人間の本性論からすれば、その議論の仕方それ自体に違和感が生じる。というのも、人間は、倫理的に正当化されないことであっても、

それを行なうことがしばしばある。この世から、騙し、いつわり、暴力などが消え失せないのはなぜなのか。多くの人々はそれらが倫理的には正当化できないことを知っているのに、それがいまなお多くの人々を苦しめているのはなぜなのか。その背景には、倫理的には正当化できないことであっても、それがたとえば人間の自己利益の本性にかなっていれば、人はそれを実行してしまい、そして他の人々もそれを批判できないようになっていっているのではないのか。この点は、倫理・規範と人間の本性との関係という大問題につながっていくので、ここではこれ以上語らないことにするが、いずれきつちりと詰めなければならぬ。

ところで、前節で見てきたパターンリズムの正当化論は、「ささえの本性」にかんして私が考えてみたいこととは、若干ずれている。「ささえの本性」論において私がいま注目しているのは、苦しんでいる者を助けてあげたいという「ささえの本性」が、逆に苦しんでいる人を支配したり、搾取したりすることがあり得るということであった。そこにおいて、どのような権力や支配が生成してくるのかということであった。

私が注目したいのは、パターンリズムという「おせっかい」がどのようなして正当化されるかということではない。そのような「おせっかい」がどのようなして権力支配関係を生成させるのか

ということなのである。

権力支配関係を内包したささえの行為にいちばんはまりやすいのは、なんと言っても医師と教育者であろう。もちろん、すべての医師や教育者がこれにはまるわけではけっしてない。しかし、その危険性はこのふたつの職業ではかなり高いと思わざるを得ない。

たとえば、医師になろうとしている学生たちに、どうして君は医師になりたいのかと聞くと、医師になって苦しんでいる人たちのいのちを救ってあげたいと答える人がけっこういる。そのようなメンタリティーに加えて、受験競争を勝ち抜いたエリート意識、医学教育・卒後研修などによって身に付いてくる「上に立つ者」の意識、みんなから「先生、先生」と言われて形成されていく権力意識、専門知識を自分たちだけがもっているという特権意識などが貼り付くことによって、私が親身になって考えてあげることが、結局は、いちばん患者さんのためになるのだ という根拠のない確信をこころの底にいただくようになる。そうだったが最後、医師が親身になって考えてあげることそれ自体が、患者のほんとうの意見を封じ込め、患者の自由意思をやりわりとそぎ取っていく危険性をもつのだということに、しだいに鈍感になってゆく。

重い病気を持っているとき、患者はただでさえ医師の顔色をう

かがう。いま入院している担当医のごきげんをそこねたら終わりだという気持ちがあるから、患者は医師の今日の気分や表情などを敏感にうかがって、なるべく医師を怒らせように気を使い、医師の言うことにはなるべく逆らわないように気をくばる。

そこにはすでに、はつきりとした上下の権力関係が成立しているのだ。具体的な治療方針やその選択肢は医師が決定して患者に示すのであり、その逆ではない。その点では、医師 患者の平等な関係性というものは存在しない。

そんなときに、医師から、「私はあなたのことを心底から思っ
て、あなたを助けてあげたいのだ」と言われれば、患者はもうな
にも反抗することができなくなる。「ささえ」の善意でもって、
ある治療を薦められるとき、患者はほんとうはそれがいやであつ
ても、「あなたのことを心底から思っ
て」と言う医師のことばに
逆らうことはとても難しい。なぜなら、そこには、「こころの底
からあなたを助けてあげたいと思っ
ている」医師と、「先生がそ
う思っ
てくれる以上、その思いを無にするわけにはいかない
な」と思っ
てしまう患者のあいだに、共犯的な 支配 の構造が、
みごとにできあがっているからである。

かくして、患者はその手術を受けたくはないのに、しぶしぶ受
けてしまうことになったり、別の断わりの理由を探そうとしてこ

ころを痛めたりする。そして、仮にその手術が成功したとしても、なにか医師によって押し切られたような感覚がいつまでも残ったりする。もしそれが失敗したりしたら、あのときにきちんと断わっておけばよかったという後悔の念と、なぜあのときに自分が断われなかったのかという自責の念が沸き上がってくるであろう。

このときのひとつの大問題は、そのような患者の悩みが、医師側からはきわめて見えにくいことである。一般に、上下の権力関係が成立している場合には、上に立つ者は下にいる者の悩みが分かりづらいのだが、それに加えて、この場合は医師が「助けたい」という「ささえ」の思いでいっぱいになっているわけだから、自分の思いが逆効果を呈しているかもしれないということをやけいに感じとりにくい。

このように「あなたのためを思っている」というささえの思いこそが、もっとも強固な権力支配構造を作り上げてしまうことに、我々は敏感にならなければいけない。

教師についても同様だ。「君の将来のことを思うから、いまこれをしなさいと言っているのだ」という生徒のコントロールの仕方が、生徒から責任ある判断力を奪い、彼らを複雑に屈折させていくという構造はあると思う。「私が君たちのことを思って教育をしようとしているのだ」という教師の思い上がり、事態をさ

らに悪化させているという面はあるのではないか。私自身がいま大学教師なのだが、自分が教えている学生に対して、ふと気がつくくと、そのようにふるまっていたりして、ギョツとすることがある。この問題はとても根が深い。『宗教なき時代を生きるために』第二章でも触れたが、医師や教育者という職業は、隠された内なる権力欲と、どこか結びつきやすいものを持っているような気がする。

自分のことを「親身になって思われて」、そして自分の意に反することをその人から押しつけられるときの、はかりしれない屈折したダメージというものは、それを受けた人間でなければ分からないかもしれない。とくに、自分が尊敬する人であった場合、もうどうしようもないところにまで追いやられてしまう。これが、ささえの本性から生成してくる権力支配構造のいちばん悲惨なパターンなのである。

そのような事態に陥ったとき、人がいちばんとりやすいのは「自傷行為」であると思う。自分より権力をもっていたり、自分が尊敬しているような人が、私のことを親身に思って、なにかを薦めてきたとする。それは、たとえば手術であるとか、自分の人生の進路を決めるようなことだとか、結婚などにかんすることだとか、そういう重大事なのである。しかしながら、私は、ほんとうはそ

れを望んでいない。別の選択をしたいとほんとうは思っている。しかし、上下関係のおかげで、私は断わりにくい雰囲気になっている。

そのようなシチュエーションで、たとえば私が「ちょっとそれは……」と言って断わりかけたでしょう。しかし、相手は、自分の善意を信じているから、「ほかならぬ君の将来のことを思っよう言うのだ」と再度押ししてくるであろう。そのとき、私が、相手の善意と、わたしのことをこころの底から思ってくれるその人の気持ちを分かれれば分かるほど、相手の申し出に逆らうことが難しくなっていく。こんなに私のことを思ってくれているのに、それに逆らおうとする私は、なんと悪い人間なのだ、エゴのかたまりなんだと思ってしまう。そして、口に出して反論することができずに、そのまま押し切られてしまう。

相手のほうはと言えば、自分の善意がそれほどまでに私を抑圧し、苦しめたということにまったく気付いてない。自分が正しいと思うことが、やはり最後は通るのだと、どこかで満足感に似たものを感じていたりする。それがその人の予定調和であり、世界は自分の予定調和のとおり進むものだと思っっているのだ。

しかし、その人の予定調和で押し切られた私のほうはどうなるのか。

人生の重大時において、自分の意志が曲げられてしまったわけだから、その不満をどこかで晴らしたいのだが、はけ口がない。その人に押し切られた自分が悪いということとは分かっているの
で、相手に文句を言うわけにもいかない。それだけではなくて、相手の善意と私を思ってくれる気持ちは身に染みて実感している
ので、その鬱憤を相手に向けるわけには絶対にいかない。しかし、この屈折したやりきれなさを、消してしまったり、ほかの誰かに向けるわけにもいかない。

その結果としてどうなるか。結局、自分がふがないからだ。自分がダメだったのだと内向するしかない。相手の善意は分かっているから、相手を悪者にすることはできない。だとすると、悪者はこの私しかないではないか。悪者なんかこの世から消してしまいたい。いなくなればいい。私なんかいないほうがよかったんだ。そういうふうに思い詰めて、自傷行動に走ることになるのである。

「あなたのためを思って」してあげた側の人間からすれば、な
んで目の前の人
が自傷行動をしたり、自殺したりしなければなら
ないのかが分からない。それが分かるのは、その人が権力と尊敬
の座から転がり落ち、自分の意に反することを「思いやり」の名
のもとに強制されるときのみであろう。

同じようなことは、当然ではあるが、親と子のあいだでも生じてくる。

親が、子どものためを思って、いやがる子どもを強制的に塾にやる。そのとき、その行為が正当化されるかどうかという倫理学の問題とは別に、そういう行為が親と子のあいだにどのような権力支配関係を生み出し、子どもの内面にどのようなものを刻印し、そして子どもが人格形成をしていくなかで、どのように子どものパーソナリティに影響を与えていくのかという問題が残っているのだ。

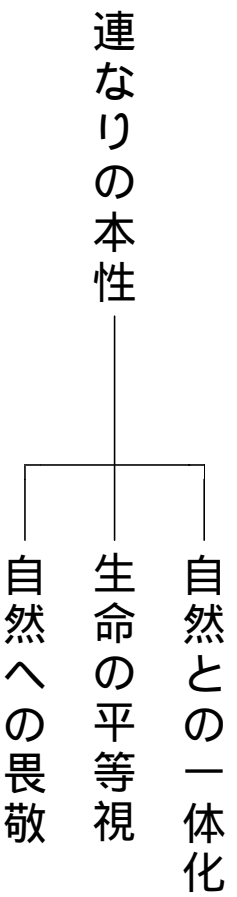
「愛という名の支配」が人間の人格形成に与える問題点。そこからいかに権力的かつ依存的パーソナリティが生成してくるのか。そこを解明することなしに、今日の人間関係論、とくに女性学や男性学はもう一歩も前には進めないと私は考えている。その解明は、いま準備している 生命学・第二巻 において全面展開する予定である。「ささえの本性」が生み出す権力支配関係と、それにともなつて生じる様々な問題群については、まだ論じるべきことがたくさんあるのだが、それについては将来の課題とし、ここで「ささえの本性」の検討をひとまず終わることにしたい。

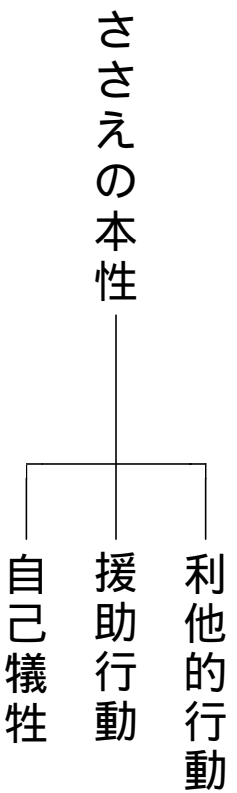
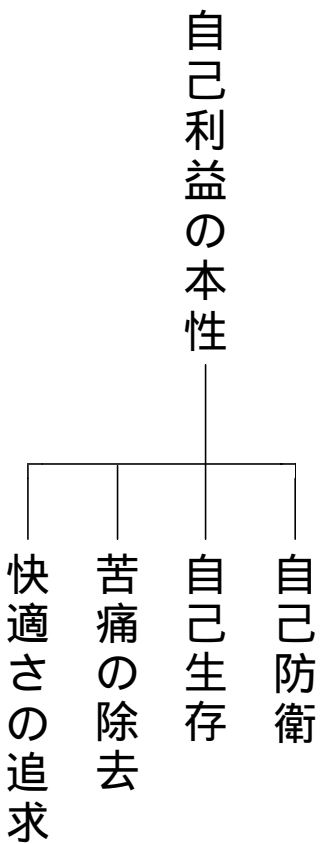
第九章

前回まで、人間の生命の三つの本性について、それぞれ詳しく検討してきた。

それでは、それら三つの本性がお互いにどのように関わりあっているのかを考えてみたい。三つの本性は、同じ方向へ歩み寄りたり、はげしく衝突したりする。

もう一度、人間の生命の三つの本性を振り返っておこう。





連なりの本性とは、いまここに生きている私の生命を、大いなる自然・私を産み出してくれた生命の母体へと溶け込ませ、それとつながりあい、一体化して、自分をそのなかへと消し去りたいという本性である。そして、そのような一体化のなかに、生と死の意味を見出したいという本性である。

自己利益の本性とは、自分たちの生き残りや、利益や、快適さのために、他の生物や他人を犠牲にしたり搾取してもかまわないと考えてしまう本性である。これは、人間のエゴイズムとか、貪欲な生き方をささえている本性だ。

ささえの本性とは、困っている者、助けをもとめている者、苦

しみを訴えている者、不安におびえる者などを見たときに、彼らを助けてあげたい、ささえてあげたい、世話してあげたい、守ってあげたい、願いをかなえてあげたいと思い、行動してしまう本性のことである。

これら人間の生命の三つの本性は、お互いにいつも調和しているわけではない。

それらは、まずそれぞれの本性の内部においていくつかの矛盾をかかえこんでしまう。と同時に、それぞれの本性のあいだで、調停不可能な衝突を生み出してしまう。このあたりの様子を、調べていきたい。

まず、それぞれの本性の内部で生じてしまう矛盾とは何なのだろうか。

連なりの本性の場合を考えてみる。私は、大いなる自然へと自分を一体化して、そこへ自分を消し去りたいと思う。しかしながら、その一体化のほとんどすべてのプロセスにおいて、一体化しようとしている「自分」という主体は、しぶとく残存してしまうのだ。ほんとうに一体化してしまえば、一体化したいと思っっている自分すら消滅してしまうはずだが、自殺しないかぎり、そんな境地にはほぼ至れない。だから、一体化したいにもかかわらず、一体化できない「自分」というものがどうしても残されてしまう。

そういう矛盾を、私は抱え込まざるをえない。

もちろん、「自分」を保持したまま、自分と自然世界との境界線をなくしてゆくことが真の一体化なのだという考え方はあり得る。しかしその場合でも、一体化して自分の殻をはずしていこうとする衝動と、一体化によって消え去らない自分とのあいだの緊張関係を、最後まで抱え込まなければならぬという事態は同じである。

連なりの本性のもつこの矛盾・緊張関係は、私が大自然のなかに死んでゆくそのときまでずっと続く。一〇〇パーセント一体化したいのに、どうしても「自分」というものが残されてしまうと、いう思いこそが、「人間は自然から切り離された存在だ man apart from nature」という思想を生み出し、「人間は神や超越者から絶対に切り離された存在だ」という思想を生み出したのではないだろうか。一体化に関するこのようなペシミズムは、人間と自然、自己と世界の関係性の、ある面での真実を的確にとらえていると私は思う。

エコロジー思想、トランスパーソナル心理学、神秘主義・修行系の宗教などが強調するように、人間と自然世界は分断されているのではなくて、物質の循環、知覚の成立、深層のはたらきなどの面でつながりあっている、ということはある。しかしなが

ら、そのようなつながりあいが一〇〇パーセントの一体化をもたらすことはなく、つねに分断された「自分」が切り離されて残存してしまふという事実から目をそむけてはならない。これは、宗教哲学の大問題へと発展してゆくので、ここではこれ以上述べないが、大事な点である。

自己利益の本性的な場合はどうだろうか。以前にも述べたが、自己利益の本性は、「自己」を自分を超えた何かにアイデンティファイすることによって成立する。たとえば、「自己」を「日本」という国家にアイデンティファイするときに、ナショナリズムという形をとって自己利益の本性があらわれてくる。ここで注意しておかなくてはならないのは、「自己」の境界はアメーバのように伸び縮みするということだ。あるときは国家にまで拡大するが、またあるときには自分の「家族」レベルでとどまってしまう。エゴイズムのように、自分自身のこの身体だけに同一化することもある。

したがって、私は複数の自己利益の本性を同時にもつことになる。たとえば人間は、自分自身のこの身体が一番大切だというエゴイズムをもっているし、家族のためならほかのことは全部犠牲にできるという家族主義もある。と同時に、「がんばれニッポン！」のようなナショナリズムもまた強くもっている。人種差別

を見聞きして腹が立ったときには、人類全体にまで押し広げられたヒューマニズムが芽生えているのであろう。これらのあいだで、実に様々な矛盾や衝突が生じてくるのである。

たとえば、地球温暖化と資源枯渇を防いで人類の将来の安全を確保しなければならぬことは分かっているから、そのための省エネと生活水準の低下を引き受けたいというヒューマニズムがある一方で、自分が快適に暮らすためのエアコンや交通網は手放したくないというエゴイズムがある。このふたつの自己利益の本性は矛盾し、私のなかで衝突する。会社に自己をアイデンティファイさせている会社人間の場合、会社をとるか、家族をとるかという自己利益同士の衝突もあるだろう。

このような衝突は、ひとりの人間の内部でのみ起きるのではない。むしろ、民族主義同士の衝突と殺戮、国家と国家のあいだの戦争などに見られるように、アイデンティファイするものが異なった人々のあいだで、どうしようもない暴力衝突が繰り返されている。あるいは、ある人間が国家への反逆者として監獄に入れられるとき、そこでは、自分の意志をつらぬいて生きたいとするその人間のエゴイズムと、国家にまで拡大された人々の国家意識¹¹ ナショナリズムが衝突して、その結果、後者が前者を押しつぶしているのである。

ささえの本性については、前回にくわしく述べた。ささえの本性が抱え込んでしまう矛盾とは、「目の前で困っている者、苦しんでいる者を助けてあげたい」というささえの思いこそが、往々にして目の前の者をさらに圧迫し、身動きを取れなくさせ、自己主張の機会を奪ってゆき、ささえる者とささえられる者とのあいだに権力支配関係を生み出し、あげくの果てにはその人間を死にまで追いやっていく危険性をはらんでいるということだ。そして、そのような抑圧は、「ささえ」の思いでいっぱいになっている側の人間からは見えないことが多いのだ。ささえられる側から見ても、たとえば自分の癒しのために援助をやっているような人の場合、そんなものは受けたくないという気持ちになることもある。このあたりの矛盾は、相当、根が深い。

このように、三つの本性は、まずそれぞれの内部において、根の深い矛盾や衝突を抱え込んでいる。そのような矛盾や衝突が生じてしまう根本原因は、おそらく人間が「個」として存在しているところにある。人間が、自然からも切り離され、他人からも切り離された「個」として存在しているからこそ、その「個」が外部の自然に向かったり、他者に向かったりするとき、このような矛盾や衝突が立ち現われてしまうのではないだろうか。だとすると、これらの矛盾や衝突というのは、原理的に解消不可能だと

いうことになる。

2 自然保護と開発をめぐる例

それでは、次に、三つの本性のあいだで生じてくる衝突について考えてみたい。

これについては、すでにこの連載の冒頭でも述べたことがある。すなわち、まず自然保護の場面では、なぜ自然を守るのかという点に関して、それが人間のためになるから守るのだとする「保全」の立場と、自然それ自体のために守るのだとする「保存」の立場があつて、そのふたつは往々にして衝突するのであつた。あるいは、社会福祉の場面では、なぜ他人を援助するのかという点に関して、それが結局は自分のためになるからだとする「利己主義の援助思想」と、他者自身のために援助するのだという「利他主義の援助思想」があつて、そのふたつもまた衝突する。

前者の衝突の背後には、「自己利益の本性」と「連なりの本性」の対立がある。後者の衝突の背後には、「自己利益の本性」と「ささへの本性」の対立がある。

これらの点を、実例をあげながら、もう少し検討してみよう。ある地域の森林を切り開いて、そこに大規模な宅地を開発する計画が浮上してきた。すぐに、開発反対の運動がおきてくる。開発を進めているのは、都市部の過密に悩む自治体と、開発業者である。反対しているのは、地元の住民の一部、近くで漁業を営んでいる人たち、そして全国的な自然保護団体などである。

まず開発側の意見を聞いてみよう。

彼らは言う。都市部に人口が集中するようになって、宅地が不足している。それに伴って地価が上昇している。このままいくと、普通の人はもう都市部では家をもてないようになる。だから、通勤圏内に新たな宅地を開発して、市民の住宅を確保しなければならぬ。高く狭い街中の一室で暮らすよりも、郊外の環境のよい住宅地で暮らすことのほうが豊かな生活である。たしかに開発によって緑が少なくなることは事実だ。しかし、人間の生活をとるか、緑をとるかとなれば、答えは決まっている。大事なのは人間のほうだ。人間よりも自然のほうが大事だという考え方は、人間蔑視の思想だ。

これに対して、反対運動をしている人たちはどうなのか。

ある住民は言う。いままで緑の多い環境で暮らしてきたのに、裏山まで宅地になってしまうと、ここの地域の良さがなくなっ

しまう。私は緑を根こそぎにするこの開発には反対だ。近くで漁業を営んでいる人たちは言う。その山の緑を削ってしまうと、山に保水機能がなくなつて、雨が降つたら泥水が滝のようになって海に流れ込むようになる。それは大きな損害だ。自然保護団体は言う。山の木々を切つてまで、ここに住宅を立てなければならぬ理由はどこにあるのか。都市には人間が集中しすぎているのであつて、それをさらに過熱させる行政を自治体が行なうべきではない。人間は自然のなかではじめて生きていけるのであつて、山にはえる木々や小さな草花にも生き続ける権利があることを忘れてはならない。

このほかにも、業者の利権や政治がらみの問題点の指摘などがあつたり、地元に住んでいないものが何を言うかという感情的な反発があつたり、開発の思想に対する文明論的な批判があつたりして、たいへんなデイベートが続くことであろう。

このような、典型的な開発賛成か反対かという衝突のなかにも、人間の三つの本性レベルでの衝突が、姿を変えて反映していることがある。もちろん、本性論だけで説明できるわけではけつしてないが、本性論の問題がそこに伏在していることもまた事実なのだ。

たとえば、開発側の論理は、「人間の側の快適さの追求」と、

「自然環境をそのまま大切に残しておきたいという気持ち」とを天秤にかけたときには、人間の側の利益の方が優先されるべきだということである。これは、地域住民にまで拡大された「自己利益の本性」が、生命の平等や自然への畏敬を生み出す「連なりの本性」よりも優越するのだという主張である。

ケースは異なるが、たとえば長良川河口堰問題で、推進派が一貫して主張したのは、このままにしておいてももし大水害が起きたら、いつたいどうするのかということであった。住民がたくさん死ぬかもしれない、住宅や田畑などの財産が失われてしまうではないか。たしかに自然の景観をそのまま残しておくことも大事だが、人命の大切さに比べれば優先順位は下がるはずだ。これもまた、住民の「自己防衛」と「自己生存」がすべてに優先するという、「自己利益の本性」にもとづいた論理だったと思う。

では、先の例で、宅地開発反対側の主張はどうだろうか。まず、開発するといままであった緑がなくなってしまうという住民の反対には、エゴイズムのおいがする。いままでは緑の近い住宅地に住んでいて、その恩恵を味わっていたのに、その緑が削られて多くの人間が入ってきたら、もう自分は緑を味わうことができない。だから反対だというわけで、ここにあるのはエゴイズムという形の「自己利益の本性」であろう。

ただし、たぶんそれだけではない。その人は、どうして緑が近くにあったほうがいいと思うのだろうか。おそらくその人は、仕事が終わったあとや、休日などに、近くの林まで散歩して自然を味わい、身体とところを休めていたにちがいない。そうすることで、その人のなかにある「連なりの本性」が活性化されて、自然についていいあと思っていたのではないだろうか。だから、その人は、近くの緑を手放したくないのだろうか。だとすると、そこには「連なりの本性」もまた潜んでいることになる。

宅地開発をしたら漁業の邪魔になるという反対もまた、エゴイズムである。もし仮に宅地開発をしたら、何かの理由で港に魚がたくさん寄ってきて漁獲量が上がるということが分かったとしたら、その人は一転して開発に賛成するのではないだろうか。エゴイズムが主要動機で反対しているとすれば、そういうことになるだろう。

自然保護団体の場合は、まず都市化や物質文明への批判がある。行政への不信もある。それに加えて、木々や草花それ自体の生きる権利のようなものを大切にしたいという「連なりの本性」もまた動機のひとつになっている。自然保護運動をやっている人のなかには、都市の真ん中に立派な部屋をもって住んでいる人もたくさんいるので、言行一致については疑わしい場合もあるが、そこ

に「連なりの本性」へのまなざしがあることは確かであろう。

そのほかにも、開発に反対する人々の心情のなかには「昔からはえている木を人間が勝手に自分だけの都合で切ってしまうなんてかわいそう」というような同情に近い気持ちがあったりする。これは確かに、人間が自分の感情をかってに木に投影して同情している人間中心主義の典型的なあらわれであるのだが、しかしながら、その感情のなかには、同時に、自分と同じ生命の母体から出てきた存在である木々への「連なりの本性」もまた見られるのである。

このように、開発か自然保護かという場面で様々な意見が対立するとき、その背後で、「連なりの本性」と「自己利益の本性」が衝突している場合がある。本性レベルでの衝突が背後にひかえているとき、その意見の対立は調停不可能である。そこから先は、政治的妥協か、あるいは対立を生み出さないような選択肢を探し出して行動していくしかない。このあたりのことについては、後に考えてみたい。

次に、人工妊娠中絶を例にとって考えてみたい。

人工妊娠中絶をどう考えるかは、生命倫理の最大の難問のひとつである。中絶に賛成する立場をプロ・チョイスと呼び、反対する立場をプロ・ライフと呼ぶこともある。キリスト教の伝統のある国々では選挙のたびに中絶が問題となる。日本でも、優生保護法改正をめぐつて、中絶論争が繰り広げられてきた。

これら中絶論争のなかにも、いままで述べてきたような三つの本性の衝突が姿をあらわしている場合がある。もちろん中絶の場合でも、本性論だけで問題の構造が解明できるわけではない。政治力学や、思想的・宗教的イデオロギーや、経済的な問題が大きな役割を果たしていることは言うまでもない。しかし、それらとともに、人間の生命の本性の問題もまた潜んでいることに注意を払っておきたいのだ。

中絶賛成の立場には、(1)「女性援助論」(2)「女性の権利論」(3)「ヒューマニズム」(4)「パーソン論」などがある。

まず、女性援助論(私案の名称)から考えよう。レイプによって妊娠したときや、経済的困窮などによって子供を育てていけないときや、妊娠が自分のこれから人生設計に大きな負担をもたらすときなどに、女性は大きな苦しみにおちいる。こんなとき、そ

の女性が中絶することをみんなが承認し、彼女を援助し、彼女を生きやすくしてゆくことがもつとも大事なのだとする考え方である。ここにあるのは、目の前で困っている具体的な女性を前にしたときに、その女性の苦しみを解決することが大事であるという発想だ。女性の中絶をサポートする具体的な感情としては、これがかかなり大きいのではないだろうか。

「女性の権利論」というのは、「中絶をも含めた産む産まないは女性が決める」という考え方のことである。男性や、国家に命令されるのではなくて、女性自身が決定する。なぜかと言えば、妊娠と中絶はほかならぬ女性の身体の中なかで起きることであり、女性の身体は女性のものである。それを、女性の権利あるいは人権としてとらえてゆく。最近では、「性と生殖に関する権利・健康」という考え方のなかで中絶の権利が主張されるようになってきた。

女性の権利論は、胎児の生存権との対立という図式のなかで主張されることもある。すなわち、「女性の中絶する権利」は、胎児がまだ小さいあいだであれば、「胎児の生存する権利」よりも上位に置かれるというのである。女性の権利を、一種の「自己防衛権」として認めるといいうのである。自分の身体の中なかで意図に反して肥大してくる胎児から、女性が自己防衛する権利

として、中絶をとらえようとするわけである。

ヒューマニズムというのは、この世に生まれてきて生活している人間の生命をもっとも大事なものと考える思想である。この世で生活している人間であれば、性別、国籍、階級、人種、肌の色などに関係なく、平等に扱わなければならないと考える。これは、近代市民革命をきっかけにして世界に広まった思想であり、近代社会の理念をあらわしている。

ところが、以前にも述べたように、この世で生活している人間のあいだの平等を強調するためには、それ以外の存在者との区別もまたはつきりさせないといけない。そこを明確にしないと、この世で生活している人間のあいだの平等が浮き立たなくなる。そこで、ヒューマニズムの立場は、たとえ人間であつても、この世に生まれてきて生活している人間と、まだ生まれてきていない胎児を区別しようとする。具体的にどこで線引きをするのかは様々だろうが、まだひとりでは生きてゆけない胎児を、この世で生活している人間とは別のカテゴリーの存在者だとして、このふたつを区別することになる。そして、このふたつを天秤にかけたときには、この世で生活している人間の生命のほうが大切だと考えるのである。

これが、「近代的なヒューマニズム」の構造であると私は思う。

ただし、ヒューマニズムということばは、立場によって使い方が違う。胎児の生命を絶対視する人々もまたみずからの考え方をヒューマニズムと呼ぶことがある。この点は注意しなければならぬ。

近代的な意味でのヒューマニズムが、ある方向に抽象化を遂げると、「パーソン論」と呼ばれる考え方になる。パーソン論とは、自己意識や理性や利害関心のある存在者のみが、第一義的には生存する権利があるとする考え方である。要するに、初期胎児のように、あきらかに脳神経系が未発達であつて、自己意識が芽生えていないと思われる存在者には、生存する権利がない。そのかわりに、小さな子どものように、自己意識が芽生えて、自分はこれがしたいというような利害関心が芽生えてきた存在者には生存する権利がある。だとすると、自己意識や、理性や、利害関心はいつたいいつごろ人間に芽生えるのかということになるが、それはパーソン論の論者によつて異なってくる。

ひとつの極論は、たとえば初期のM・トゥーリーの考え方で、人間にそれらが芽生えるのは出産後ある程度時間がたつてからだとする。だから、中絶は道徳的に問題はないし、出生後の嬰兒殺しもまた問題がないと言うのだ。そして、植物状態の人間や痴呆性老人もまた生存権をもたない可能性があるとする。さらに、

あきらかに自己意識のあるサルなどは、我々と同じように扱うべきであると言う。現在の英米の生命倫理学の主流の考え方のひとつは、このパーソン論を基軸に、倫理を構築してゆこうとするものである。

パーソン論は、中絶を容認する立場になることが多いのだが、しかしながら、これからの科学的知見の展開によつては、中絶反対にまわるかもしれないという微妙さをかかえている。というのも、人体発生学の研究が進むにつれ、きわめて初期の胎児にも脳神経系の活動があることが分かってきているからである。もし、子宮内胎児行動学がさらに進展すれば、胎児がきわめて初期の段階から、自己意識や利害関心があるかのようにふるまうことが分かるかもしれない。もしそうなれば、パーソン論は、そのような胎児を中絶することは悪であるという立場に鞍替えしてしまうであろう。この意味では、パーソン論は、中絶賛成派にとっては両刃の剣であるかもしれない。

では、人工妊娠中絶反対の立場にはどのようなものがあるのだろうか。

大まかに言つて（１）「人間生命尊重論」（２）「生命畏敬論」（３）「胎児同情論」などがある。

人間生命尊重論とは、この世に生まれて生活している人間であ

ろうと、まだ生まれてきていない人間であろうと、すべての人間の生命は尊重しなければならぬとする考え方である。脳神経系がまだ未発達だとか、母体から離れて生存できないからといって、胎児を殺してしまうことは、人間の生命を冒瀆するものである。成人であろうと、胎児であろうと、それらの生命は平等なのであり、ひとしく扱わなければならない。

キリスト教（とくにカトリック）は、この考え方を徹底する。人間は胎内で受精したときから、かけがえのない人間の生命となる。それはそのときから尊重されるべき存在者なのであり、中絶によって殺してしまうことは殺人にひとしい。マザー・テレサが中絶絶対反対論者であったことはよく知られている。キリスト教は、欧米のみならず、日本においても、中絶反対のキャンペーンを行ない、政治的な活動をしてきた。

人間生命尊重論は、しかしながら、すべての生命の尊重は謳わない。彼らが強調するのは、あくまで「人間の」生命の尊重である。人間ではない、たとえばブタやハチの生命は、人間の生命よりは価値が低いと考える。そのあいだには、はっきりとした価値の上下があるのだ。たとえば、キリスト教では、人間の生命と、それ以外の生命のあいだには価値の上下があり、その区別は神によってなされたことになっている。

生命畏敬論というのは、これとは若干異なっている。生命畏敬論は、地上に存在するすべての生命は尊いというふうに考える。人間の生命であれ、ブタの生命であれ、虫けらの生命であれ、いやしくも生命である以上、それらはすべてひとしい価値をもっているのだと考える。もちろん人間はエゴイステイックな存在だから、自分の生命がいちばん大事というふうに考え、行動する傾向をもっている。しかし、その傾向にあえて逆らって、すべての生命は平等だという方向に考えをすすめて、行動していこうとする立場である。

それによれば、胎児の生命もまた、成人した人間の生命や、ブタの生命などと同様に尊重すべきものであり、それをむやみに中絶するのは避けなければならぬことになる。だから、基本的に、中絶反対となるはずである。生命畏敬論は、シュヴァイツァーの思想などに見られると言われている。だが、それよりもむしろ、我々一般人の思考様式のなかに、ひろく埋め込まれていると考えられる。私は八〇年代末から日本の生命観を調査しているが、その途中結果を見ると、そこには「人間のいのちも、動物・植物のいのちも、平等である」という考え方が広い範囲に存在することが分かる。生命畏敬論は、我々の日常意識のなかに薄く広がって存在していると考えられる。人々が、中絶は悲しいな、残酷だ

なと感じるときに、彼らのなかにあるこの感覚が刺激されているのかもしれない。

胎児同情論というのは、中絶によって殺されてゆく胎児が「かわいそう！」というものである。殺されてゆく胎児に自己を投影して、同情しているのである。子宮内の胎児の写真やビデオ映像がメディアに流通するようになってから、この感情がさらに広まった。手のひらよりも小さい胎児に、ちゃんと顔もあり、目もあり、表情もあり、子宮のなかでぴよんぴよんはねて動いているという姿を、我々は見ることができるようになってきた。そんな胎児を、ばらばらにして殺してしまうなんて「かわいそう！」というわけである。

子宮内の胎児の様子は、中絶反対派の活動家たちによってメディアに流されるようになっていく。それらの映像に衝撃を受けたナイーブな人々が、中絶反対に回る可能性は高い。いままで人々が中絶を選択できてきたのは、胎児の状況をリアルに知ることができなかつたからかもしれない。テクノロジーの進展は、このような我々の生命観にまで影響を与える潜在力をもっているのである。

中絶に賛成したり反対する理由は、ほかにもあるはずである。ここでは、大まかな理由を整理した。それぞれの詳しい分析は、

また今後の課題としたい。

ところで、これらの賛成・反対の理由のなかにもまた、人間の生命の三つの本性が複雑に投影されていると思われるのである。

まず、中絶賛成派の考え方から見てみよう。「女性援助論」というのは、様々な理由で望まない妊娠をした女性の困惑や苦しみを援助するために中絶を許可するという考え方だ。これは、苦しんでいる人を助けてあげたいというささえの本性に根ざしている。「女性の権利論」は、女性のグループに対して、胎児の生存権を上回る権利（とくに自己防衛権）を与えようとするもので、女性のグループにまで拡大された自己利益の本性がそこにはある。「ヒューマニズム」は、この世に生まれてきて生活している人間のグループが、まだ生まれてきていない人間たちより優越すると考えるわけで、そこにあるのは、この世に生まれてきて生活している人間たちにまで拡大された自己利益の本性である。同じように、「パーソン論」もまた、自己意識や理性や利害関心のあつる人間たちにまで拡大された自己利益の本性に根ざしている。

中絶反対派はどうだろうか。「人間生命尊重論」とは、この世に生まれていようがいまいが、いやしくも人間であるかぎりひとしく尊重すべきだとする。そのかわり、人間以外の生命とはおのずから価値の上下がある。だから、ここには、受精卵も含めた人

間のグループにまで拡大された自己利益の本性がある。これに対して「生命畏敬論」は、人間だけではなく、すべての生きとし生けるものの生命はすべてひとしく尊重すべきだとする。これは、「生命の平等視」「自然への畏敬」の傾向性を生み出すところの、連なりの本性から出てきたものだと考えられる。「胎児同情論」は、親の意向によって一方的に殺されてゆく胎児がかわいそうというもので、そういう胎児をなんとかしてあげたいという思いが基礎にある。ここには、苦しんでいる者を助けてあげたいというささえの本性がある。

このように、同じ本性が、中絶賛成と反対の両方にあらわれる場合すらある。中絶論争が混乱の泥沼に落ち込んでいくひとつの原因は、このように複雑にからまりあつた本性レベルでの衝突の網の目が、底辺にあるからだと思は思う。

以上に述べたことを、もう一度図式化しておこう。

中絶賛成

- (1) 女性援助論
- (2) 女性の権利論
- (3) ヒューマニズム
- (4) パーソン論

中絶反対

(1) 人間生命尊重論

(2) 生命畏敬論

(3) 胎児同情論

連なりの本性……生命畏敬論

自己利益の本性……女性の権利論、ヒューマニズム、

パーソン論、人間生命尊重論

ささえの本性……女性援助論、胎児同情論

自然保護や老人問題などもまた、これと同じような複雑な構造になっていると思われる。ここまで複雑に本性が衝突して混乱したものを、いったいどのようにしていけばいいのだろうか。この、もつれた糸をどうやって解きほぐしていけばいいのだろうか。それを考えると、重苦しい気分につつまれ、絶望の壁にぶつかってしまう。出口はないのだろうか。

今回は、少し異なった視点からふたたび考えてみたい。この連載も、大詰めに向かいつつある。

第一〇章

人間の生命の三つの本性について考えてきた。

「連なりの本性」「自己利益の本性」「ささえの本性」は、人間の生命の奥底に刻み込まれていて、我々はそれらから自由になることはできない。それだけではなく、それら三つの本性は、それぞれの本性の内部で、そして本性同士のあいだで様々な衝突を繰り返す。そのような衝突ときしみのなかで、我々の生命はたえず引き裂かれていくのである。

ここでは、三つの本性のあいだでおきる衝突をさらに詳しく見ていくことにしたい。その衝突の様子と、そこで翻弄される人間の姿を通して、我々がいま住んでいるところの現代文明の本質が少しずつ明らかになってくるはずだ。

三つの本性が衝突したときに、どれがいちばん強いのだろうか。直観的に言えば、「自己利益の本性」がいちばん強力であるように見える。たとえば、自分たちの生命が危機にさらされたときには、自然保護なんてことは言えなくなる。人間の健康に脅威と

なる細菌や動物などは、有無を言わせず絶滅させてきた。人間たちの自己防衛と自己生存を脅かすかもしれないような生物に対しては、「連なりの本性」よりも「自己利益の本性」のほうがずっと強い。

同じように、人間のあいだの助け合いをしようとする気持ちが生じてくるのは、まず自分の生存と最低限の生活環境が整ってからのことである。以前にも書いたが、船が突然沈みはじめたとき、多くの人々はまず先を争って脱出しようとする。狭い通路を通り抜けるために、他人を押しつけてまでも自分が助かるうとする人間はたくさんいるはずだ。そうやって救命ボートに脱出して、自分の生命がとりあえず守られてから、今度はようやく後から来る人たちを手助けしようとするのである。「自己利益の本性」は「ささえの本性」よりも強い。

このように、三つの本性のなかでは、「自己利益の本性」がもっとも強く、「連なりの本性」と「ささえの本性」がその次にくるように見える。このあたりのことを、さらに詳しく考えてゆこう。

まず、自己利益の本性がいちばん強いとは言っても、自己利益の本性がかならず優先されるといっわけではない。たとえば、個人レベルでのふるまいを考えてみればすぐに分かるのだが、人間

は自分の利益を犠牲にしてまでも他人の世話をすることがある。そればかりか、他人の生命を助けるために、自分の生命を危険にさらして救助することもあるし、その結果、自分が死んでしまうことすらある。このような自己犠牲のケースでは、私個人にかんする「自己利益の本性」、とくにそのなかの「自己生存」の傾向性は、他者を救いたいという「ささえの本性」に負けていることになる。あるいは、失われゆく貴重な生物種を守るために、自分の財産や快適な生活をなげうって運動する人間もいるわけで、ここでもまた「自己利益の本性」は「連なりの本性」の前に敗北していると言わざるを得ないだろう。

だから、ひとりの個人がどのような行動をするかという次元で考えれば、「自己利益の本性」が他のふたつの本性よりもかならず優先されるとは言えない。人によっては、「連なりの本性」や「ささえの本性」のほうを優先させて行動する場合もある。この点には注意を払っておきたい。

しかしながら、社会や共同体レベルでの「自己利益の本性」が問題となっているときに、「連なりの本性」や「ささえの本性」の方が優先されるということはあるのだろうか。以前のこの連載で、「自己利益の本性」のなかには基盤的なものと派生的なもの、二種類があると述べたことを思い起こしていただきたい。基盤

的なものとは、自己防衛・自己生存・苦痛の除去などであり、派的なものとは、快適さの追求などのことであつた。この二種類を区別するならば、次のことが言える。

すなわち、社会や共同体レベルで、自己防衛・自己生存・苦痛の除去などの基盤的な「自己利益の本性」が問題になっているときには、かならずそれが他のふたつの本性よりも優先されるのである。

たとえば、ある川の上流にダムを造らなければ、雨期の増水で下流の町全体が水没することが確実な場合、たとえダム建設によつて上流の生態系が全滅しようともその町の住民たちはダム建設のほうを選択するであろう。もし、貴重な生態系を破壊するダム建設には反対という声が出てきたとしても、「生物の生命と人間の生命のどっちが大切なのだ」という声に押し切られてしまうであろう。あるいは、広範囲な飢饉が発生し、いくつかの集落で食料が決定的に不足して住民が死に瀕しているとき、いくら隣村から食料を分けてくれという要請が来たとしても、我々は決して自分たちのための食料を彼らに援助しようとはしないであろう。その食料を分け与えれば、自分たちの共同体の生存が危機に瀕するわけだから、それを許可することはできない。自分たちの生存がかかっている場合には、「自己利益の本性」が、「連なりの本性」

や「ささえの本性」に席を譲ることはありえない。

まさにこの意味で、三つの生命の本性のあいだには、厳然たる序列がある。それらが社会や共同体レベルでお互いに相争った場合に、もっとも優先されるのが、自己防衛・自己生存・苦痛の除去などの基盤的な「自己利益の本性」である。この力関係は、そう簡単にはゆらぎそうにない。

これに対して、派生的な「自己利益の本性」である快適さの追求は、「連なりの本性」や「ささえの本性」に負けることもある。たとえば、少々の快適さを犠牲にしてもある地域の生態系を保護するという決断をその地域の住民がすることもあるだろうし、食料にまだ余裕があるときなどはそれを他の地域の人々に援助することもある。快適さの追求は、他のふたつの本性よりもかならずしも強くない。

いままで見てきたのは、三つの本性が様々な状況で衝突したときどちらが優先されるのかという、いわば静的な力関係について

てであった。しかし、それだけでは不十分なので、これらの本性が時間軸にそって関わり合いを変えてゆく動的な側面についても考えてみたい。

まず、「自己利益の本性」と「ささえの本性」の関係について。

さきほど述べたように、ある共同体や社会の生存それ自体が危なくなつたとき、その共同体や社会は、自分たちの生き残りのほうを、他の共同体への援助よりも優先する。この意味では、自己利益の本性のほうが、ささえの本性よりも優先されるのであった。しかしながら、その共同体の内部の状況を見てみるとどうだろうか。自分たちの生き残りをかけて必死になっている人々のあいだには、かなり濃厚な助け合いや援助が見られはしないだろうか。たとえば、ある国が国家の存亡をかけて隣国とはげしい戦闘をしている場合、その国の内部の人々は、兵隊さんのために、我々民族のために、お互いに苦しいときは助け合い、援助しあい、戦争の勝利を願って、仲間内でのみ通用する「ささえの本性」を全面開花させているのではないだろうか。

だから、強烈な「自己利益の本性」にのっとしてふるまっている集団は、外部の人々に対する「ささえの本性」は押し殺しているけれども、しかしながら自分たちの集団内部では、むしろ「ささえの本性」を活性化させているわけである。

ただし、その場合の「ささえの本性」の実態はしつかりと見ておく必要がある。

集団の生き残りがかかっているような状況では、その集団内部のささえあいは、往々にして、「集団の主要部分の生き残り」のための助け合いのシステムになる（このことは、以前のこの連載でも考察した）。我々の社会では、しばしば集団の主要部分の生き残りのためのささえあいが構造化され、足手まといになる人々は「ささえあい」の名のもとに切り捨てられたり見捨てられたりする。それは、いわば上に立つ者と下で従う者の区別がはつきりと存在する「権力支配関係込みのささえあい」となるのである。

隣国と存亡をかけて戦闘している国の場合、その国の内部でのささえあいの姿は、まさに「権力支配関係込みのささえあい」であろうし、そのささえあいのシステムも、当該社会の主要部分の生き残りを主目的として機能するようになっていくはずである。たとえば、第二次大戦中の日本社会のなかにあったのは、天皇を頂点とする権力支配構造を背景として構築されたささえあいのシステムであった。敗戦が近くなると沖縄などが切り捨てられたのはそのことをよくあらわしている。

これは、なにを意味しているのだろうか。

私は、こういうふうを考える。ある集団が、危機的な状況にあ

つてそれを乗りこえようとしていたり、あるいは過酷な環境のもとで拡大成長しようとするとき、その集団の「自己利益の本性」はとても強く活性化する。「自己利益の本性」は、他の集団に対する「ささえの本性」を徹底的に押し殺す。そして他の集団と戦うことによって自分たちが優位に立とうとする。同じように、自分たちの集団を取り囲む自然環境が敵対的なとき（ひんぱんに洪水を起こすなど）、「自己利益の本性」は自然環境に対する「連年の本性」を押し殺し、自然環境の改変と支配に突き進む。そうすることによって、危機的な状況を脱することをめざしたり、あるいは過酷な環境のもとで自分たちが拡大成長することをめざすのである。

集団がこのようなモードにはいつているとき、その集団の内部には、「自己利益の本性」に誘導されるような形で、集団の主要部分の生き残りのためのささえあいのシステムが作り上げられる。近視眼的な「ささえの本性」は、そのシステムのなかからめ取られる。

「ささえの本性」は、集団の「自己利益の本性」によって都合のいいように変形させられ、操り人形のように利用され搾取される。そして、集団の主要部分の生き残りを第一としたささえあいが実行され、集団の主要部分にとって役に立たない足手まといの人々

は、切り捨てられていくのである。

それはたとえば、環境の悪化で食料が尽きて集団が存亡の危機にさしかかっているときや、きびしい状況下で戦争をしているとき、そして日本の高度成長のようにやみくもに経済成長をめざしている場合などである。そういう状況にあるとき、その集団はいま述べたようなモードにはいる。このモードのことを、外側からの圧力が高いという意味で、「過酷モード」と呼ぶことにしよう。

「過酷モード」においては、しばしば、人間の思考や行動パターンの一様化が進むように思われる。高い外圧のもとで、集団全体がある方向に向かって一致して邁進しなければならぬのだから、その目的に沿うような価値観や行動パターンが選択的に選ばとられることになりやすい。たとえば、高度成長期の日本では、管理社会の歯車として標準的に動く人間が学校や企業で再生産され、個性のない日本人たちが大量に出現した。あるいは、地球環境危機を生き抜かなければならない時代においては、無駄なエネルギー消費を押さえ、二酸化炭素をなるべく排出しないような行動パターンへとみんなが一様化されていくことが予想される。

さらに過酷モードでは、いざとなったときにまっさきに切り捨てられる「弱者集団」と、それを切り捨てる側に回る「中規模強者集団」の分断の姿がはっきりとしてくる。もちろん、具体的に

誰がその中規模強者集団に属するのかを明記するのはむずかしいが、その社会のシステム的中核地点に位置するような人々が、中規模強者集団を形成するはずだ。それらの人々は、経済力があり、高学歴で、人を使う側にいることが多いであろう。それらの人々が、相対的に経済力のない、低学歴で、人に使われる側にいる弱者集団を、いつでも切り捨てられるような位置に押し込んでおく。いざとなったらすぐに「切り捨て」られるように、強者集団と弱者集団とのあいだに、システム上のミシン目を入れておく。これこそが、差別の構造というものだ。「おまえなんかいつでも切り捨てられるぞ」というメッセージが、中規模強者集団と弱者集団の境目で自動的にたえず再生産され続けるようなシステムなのだ。

こうやって考えてみると、このようなモードに置かれたときにいちばん強いのは 集団の自己利益の本性 ではなくて、 中規模強者集団の自己利益の本性 だということになる。もっと正確に言えば、 中規模強者集団の自己利益の本性に裏打ちされた集団行動パターン というものが、いちばん強いのである。言い換えれば、危機に瀕してそれを乗りこえようとしたり、過酷な状況のもとで拡大成長しようとしている集団のなかに見られる、 中規模強者集団の自己利益の本性に裏打ちされた集団行動パターン

ン というものが、最強なのだ。

だとすれば、もうひとつのモード、すなわち集団に当面の危機がなく余裕ある状況に置かれていたり、豊かな資源に囲まれて現状維持をしていけばいいような場合ではどうだろうか。このモードのことを「余裕モード」と呼んでおこう。この場合、集団の生き残りをかけたような「自己利益の本性」の発露は相対的に弱まり、それにともなつて、自己利益の本性によって押さえ込まれていた「ささえの本性」や「連なりの本性」も、ふたたび少しずつ息を吹き返すだろう。福祉や自然保護が大事なテーマとして浮上してくる。中規模強者集団による弱者集団の差別構造も、相対的に薄まるかもしれない。一様化への流れも弱まって、そのかわりに多様化への流れが力をつけてくるであろう。みんなが同じ行動をするということよりも、それぞれが自由に多様にふるまってもいいという方向に、倫理は傾いていくだろう。強者の自己利益も、弱者の自己利益も、ともに同じ集団の共通の自己利益なのだという考え方が出てくる。そして、強者と弱者のあいだのささえあい、切り捨てを前提としないささえあいの可能性も生まれてくる。

しかしながら、それらは、集団が過酷な状況にある場合に比べて、相対的にそういう傾向になるというだけのことでもある。依然として、差別は消えないだろうし、切り捨てはいつでも起こり

得るであろう。余裕モードにあっても、やはりいちばん力を持っているのは「中規模強者集団」であることに間違いはない。ただ、余裕がある分、弱者の身になって考えてみる余裕が生まれるだけのことだとも言える。

このように、集団がどのような状況に置かれているかによって、「自己利益の本性」と「ささえの本性」のあいだの力関係は揺れ動く。過酷モードにおいては、「自己利益の本性」が「ささえの本性」を強く押さえ込んで鑄型にはめてしまうが、余裕モードにおいては、その鑄型にはめる力が相対的に弱まって、「ささえの本性」にも独自の活動をする機会が多くなる。このあたりのダイナミズムをさらに解明していかなければならない。

それと、集団がある面で余裕モードになっても、他の面では過酷モードに置かれているということがある。たとえば、いまの日本社会は、モノの輸出による経済成長をこれ以上する必然性がなくなったわけで、その意味では相対的に余裕モードに入っているが、しかしながら同時に、地球環境問題が出現し、エネルギー消費や二酸化炭素排出問題などの面では過酷モードに入りつつあると言える。従って、産業構造が我々にこれ以上の一様化をもたらすことは少ないだろうが、その逆に、地球環境問題は我々に行動パターンの一様化をますます要求してくることになるはずで

ある。

そのように考えてみると、物質的に豊かになって価値観の多様化が進みはじめたように見える我々の社会も、地球環境問題や高齢社会などの圧力が高まるにつれ、ふたたびかなりきびしい過酷モードの社会に突入してゆくかもしれない。そして、そのような社会では、中規模強者集団の自己利益の本性のパワーが肥大して、それを軸として社会構造が再編成されてゆく可能性がある。そのような社会のなかで、人々のささえあいがいかにして可能なのか。この点で、我々は巨大な壁にぶつかるところであろう。

長期的なタイムスパンで眺めてみれば、人間集団のおかれている環境というのは、過酷モードと余裕モードをたえず繰り返していると言つてよいのかもしれない。さらに詳しく見れば、気候条件、人口密度、食糧事情、経済状態などの様々な側面が、それぞれのペースでこれらふたつのモードのあいだを揺れ動き、それらの複合体として集団全体の過酷度や余裕度が決まってくるのである。それらの環境の変化に対応して、「自己利益の本性」と「ささえの本性」の関係は、様々な位相に置かれていくのである。

では次に、「自己利益の本性」と「連なりの本性」の関係を見
てみよう。

「連なりの本性」とは、私を生み出してくれた大いなる自然と
一体化したいと願う本性であり、自然の流れに沿って生きること
に生の意味を見出す本性である。そしてそこから、自然そのもの
の価値を大切にしようという自然保護思想が生まれてくるのであ
った。これに対し、「自己利益の本性」は、人間たちの生き残り
や苦痛の除去や快適さのためには、人間以外の生物や自然環境を
どんどん利用してもかまわないとする本性であった。

このふたつの本性は、ともに人間の生命の奥底に刻み込まれて
いる。しかしながら我々が置かれてきた文明のあり方によって、
その関係のあり方もまた異なってくるのである。

たとえば、我々がまだ農耕や牧畜の技術をもたず、ほそぼそと
木の実や小動物を採集して暮らしていた時代のことを考えてみよ
う。そのような時代には、いくら自分たちの生き残り快適さを
求めていたとしても、気候変動や、干ばつや、外敵の襲来などの
前では、それらを克服する力はほとんどもてなかつたはずだ。彼
らは、それらの脅威の前におろおろし、いろんな手で対応しよう

とはするものの、結局は自然の猛威のなすがままになって、弱い人間から死んでゆき、集団人口を減らしながらかろうじて生きのびていったにちがいない。

だから、そのような時代では、人間たちは自然のふるまいに敏感になり、自然の流れに寄り添って生存戦略を立てることによってしか、自分たちの生き残りや快適さの追求ができなかった。言い換えれば、「連なりの本性」にのっとって生きてゆくことによつて、かろうじて「自己利益の本性」が満足できたのである。この場合の「自己利益の本性」とは、もちろん、自然環境をどんどん利用しながら獲得される自己防衛や快適さのことではなくて、自然の猛威に必死で耐えながら死守されてゆく自己防衛や快適さのことである。したがって、このような文明においては、「連なりの本性」に即して生き延びてゆくことが大前提であり、その枠内において「自己利益の本性」が模索されたということだ。

ところが、人類はやがて火を発明し、石器や鉄器を開発し、大型獣を集団で狩猟するようになり、河川を改修し、農耕・牧畜を開始し、都市を形成する。これらの技術を次々と開発してゆくことによつて、人間たちは、猛威をふるっていた大自然を少しずつコントロールするようになる。農耕・牧畜によつて、食糧を継続供給するシステムができあがり、将来に向かって備蓄できるよう

になる。自然の仕組みについての知識も蓄積される。都市文明形成に至る、これら数百万年の歴史のなかで、人間たちは、自然環境をコントロールする技術体系を徐々に獲得してゆくのである。

そのような技術獲得によつて、人間たちは、自然の流れに寄り添わなくとも、みずからの自己防衛や快適さを獲得できるようになつてきた。たとえば、定期的に氾濫する河川にあわせてそのたびに住居を変えなくても、河川の流れを改修すれば、同じ地域に定住することが可能となる。あるいは、食べるのに都合のよい植物をたえず求めて歩かなくても、農耕によつてそれを毎年生産することができれば、食糧確保はすいぶん楽になる。農耕というのは決定的である。これは、その地域に自然に生えていた生態系を人間が破壊して、そのあとに食糧になるような品種を人工的に植えてゆくわけである。その地域に自然に生えていた植物をひっこぬき、人間の都合のためだけに別の植物を育ててゆくのだ。もちろん、農耕それ自体は、季節の移り変わりや自然の流れに寄り添わなければ不可能なのだが、しかしながら、人間に有用な植物だけを選択的に育てるところに、決定的な自然からの離反が認められる。この意味で、農耕こそが人類最初のシステムティックな生態系破壊だという指摘は正しい。

このようなプロセスを経て、人間たちは、「連なりの本性」に

のつとつた生活の枠内で「自己利益の本性」の満足を模索するというそれまでの行動パターンから離脱し、「連なりの本性」にのつとつた生活に逆らつてまで「自己利益の本性」を追求するという路線の文明に方針転換をはじめたのである。自己防衛や快適さの追求のためならば、他の生物や自然環境をどんどん利用してもよいという形での「自己利益の本性」が全面開花しはじめたのだ。

その傾向は、産業革命を経ることによつて決定的になつた。我々が属している先進工業諸国の文明とは、農耕・都市化・産業化のプロセスを経験することによって「自己利益の本性」の満足が相対的に肥大した文明である。もちろん、今日の地球上には様々な文明があり、そのなかには、自然の流れに寄り添うことを基本にしてゐる文明もたくさんある。先住民と呼ばれる人々の暮らしかたには、その姿勢が濃厚に見られる。だが、今日の世界を牛耳つて、地球環境そのものを悪化させる元凶を作つたのは我々先進工業諸国の文明であり、そこでは「連なりの本性」の満足にくらべて「自己利益の本性」の満足のほうに肥大していると言わざるを得ない。

つまり、自然をコントロールする技術体系をほとんどもつていなかつたときには、「自己利益の本性」は「連なりの本性」の枠内で開花するしかなかつたのだが、その技術体系を獲得して大規模に自然をコントロールできるようになるにつれて、「自己利益

の本性」は「連なりの本性」を押しつけて開花していったのである。このように「連なりの本性」と「自己利益の本性」との関係は、自然をコントロールする技術体系の発達の歴史に応じて変わってくる。これは大事な点である。では、なぜ、人間は自然をコントロールする技術体系を発達させようとしたのか。これは、人間の「知」とは何なのかという大問題とつながっている。これは、技術論や文明論の大テーマであるが、ここでは取り上げない。これもまた連載が終わってからの課題にしておきたい。

さて、農耕、都市化、産業化へと進んできた我々の現代文明においては、「連なりの本性」よりも「自己利益の本性」のほうが優位に立っている。「自己利益の本性」が優位に立つような方向に向けて、社会システムや、生活慣習や、価値観が構造化されている。そのような構造を自明なものとして受容している我々は、たとえば電力供給を確保するために自然生態系を水没させ、住宅を確保するために木々を次々と切り払っているのである。

しかしながら、我々に刻み込まれた「連なりの本性」は消えてはいない。それは現代文明においては「自己利益の本性」によって抑圧されてはいるものの、すきをみては浮上しようとして狙っている。現代においては、それはたとえば原生林を手つかずの状態で保存しようとする「エコロジー運動」という形をとってあらわれ

てくる。自然それ自体に貴重な価値があるのだから、なるべく手つかずの状態で保存しなければならないという「保存」の思想と行動が、「連なりの本性」に基礎を置いていることは以前に指摘した。そのような「連なりの本性」から発する自然保護運動の出現は、歴史的に見ても、ごく最近のできごとである。保存の思想にもとづいた自然保護運動は、ヨーロッパでは一八世紀ころから徐々に出現したとされている。それ以前の人間と自然のかかわりは、漁業や林業などのように、もつと人々の生業と密着したものであり、生業を維持してゆくための知恵としての環境管理という色彩が見られた。あるいは、自然の世界を異なるものの住む恐ろしい所ととらえ、そこからなるべく避けようとする考えもあった。逆に、そこに神や聖なるものが宿ると考えて、信仰の対象にした。それらの考え方は、結果的には、集落を取り囲む自然環境の保護に役立った。

だが、「人間による破壊から自然環境それ自体を守らなければならない」という形の自然保護思想が本格的に出てきたのは、一八世紀以降のことである。そういう考え方が出てこざるを得なかったのは、産業革命以降の急速な資源利用と人口増加と都市化によつて、人間による自然の支配と破壊が劇的に進んだからだ。そして、それに対抗するようにして、「自然を守れ」という思想が

登場した。鬼頭秀一が言うように、「自然を守れ」という自然保護思想は、「人間のために自然を利用してよい」という近代の産業主義の裏面なのである（『自然保護を問いなおす』）。それらはともに近代の産物なのである。

現代の先進工業諸国においても、「連なりの本性」を背後にもつた自然保護思想と運動は、無視できない勢力となってきた。しかし、それは、「自己利益の本性」を原動力とした現代社会の基本的な方向を変更させるまでには至っていない。最近の地球環境問題のコンセンサスとも言える「持続可能な開発」という発想には、産業文明それ自体から撤退するという考え方は入っておらず、環境問題も基本的には経済成長を続けながらその枠内で解決するというのが大枠の認識となっている。もちろん、いまのままの浪費社会を続けていけば、いずれ先進工業諸国の人間たち自身がひどい目にあうということは分かってきたから、資源の使い方やエネルギー消費の仕方は変更していかざるをえない。ただ、以前にも述べたが、その意味での環境問題の模索というのは、事態が現在と将来の人間たちの「自己利益の本性」への侵害につながるから開始されたのであり、かならずしも自然に対する「連なりの本性」から開始されたわけではない。環境問題においてすら、人々は、それが自分たちの「自己利益」への侵害になると気付いてか

らようやく動き始めるのである。自然への「連なり」というのは、現代人にとっては、いまだ大きな力とはなっていない。

このように、「連なりの本性」に基礎を置くエコロジー運動が出現したとは言え、現代文明においては「自己利益の本性」がはるかに優越している。事実認識としては、ここは動かせない。

また、都市に住むお金持ちが、自分たちの「連なりの本性」を満足させるために緑に囲まれた広大な別荘地を確保して自然を楽しむが、その柵の外ではスラムの人々が満足な住居もなく貧しい暮らしを余儀なくされているということがしばしばある。ということは、中規模強者集団の「連なりの本性」は、弱者集団の「自己利益の本性」よりも優越するというのが、現代の社会のルールであるのかもしれない。(このケースでは、中規模強者集団の「連なりの本性」の満足と「自己利益の本性」の満足とが、別荘地の確保という行為において一致しているわけである。)

以上に見てきたように、人間のあいだの関係で言えば、まず中規模強者集団の「自己利益の本性」にもとづく行動が、その他の「自己利益の本性」や「ささえの本性」に基づく行動よりも優位に立ち、人間と自然の関係で言えば、人間が自然を利用してよいという「自己利益の本性」が「連なりの本性」よりも優位に立つという構造になっている。そして、それらの本性のあいだの力関

係は、人類の歴史や、集団が置かれた状況に応じて、様々に変わってくるのである。

では、このような本性をみずからの奥底に刻み込んだ我々は、このような現代文明のただなかで、いったいどのように考え、行動していけばいいのだろうか。そのあたりのことについては、最終回となる次回に述べてみたい。

第十一章

いままでの連載で述べてきたことから、ひとつの帰結が導かれる。人間の生命は、その本性レベルで「引き裂かれている」ということである。

人間の生命の奥底には「連なりの本性」「自己利益の本性」「ささへの本性」の三つが刻み込まれていて、我々はそれらのうちのどれひとつからも自由になることはできない。それら三つの本性は、あるときは手を携えるが、あるときには正面から衝突する。そして、それらが衝突したときには、それを原理的に調和させるいかなる手段もない。なぜかと言えば、その衝突は、それらの本性が立脚している基盤自体の衝突だからである。

たとえば、ある地域の住民の安全を確保するためにダムを建設しようとするときに、ダム建設によって貴重な自然生態系が失われてしまうから建設するべきではないという反対運動が起きる。ここでは、人間の利益のためにはその他のものは犠牲になってもよいという「自己利益の本性」と、豊かな生態系には人間が手を

つけてはいけない貴重な価値があるという「連なりの本性」が、正面から衝突している。この二つが正面衝突したとき、それはもはや調停不可能となる。同じことは、「自己利益の本性」と「ささえの本性」の衝突についても言えるであろう。

つまり、正面から衝突したら調停不可能になるような本性を、我々はみずからの生命のなかに持っている。我々の奥底に刻み込まれている三つの生命の本性は、たまたまうまくいったときには手を携えることがあるのだが、しかし正面から衝突したときにはまったく調停不可能となり、我々の生命をそのもつとも深いところで引き裂いていくのである。

引き裂かれた結果として、我々は安心できる確固たる地盤を喪失する。人間として存在しているというまさにそのことが、すなわち、根底において引き裂かれて生き続けるしかないということなのだ。自分の生命に忠実になろうとすればするほど、人間は、みずからの「引き裂かれ」に対して敏感となり、不安になる。そして「引き裂かれ」を無化してくれるかもしれない癒しを探し求めようとするだろう。しかしながら、癒しは一時のこころの安定をもたらしてくれるかもしれないが、引き裂かれた生命に対する根本的な解決は与えてくれない。それは、「引き裂かれ」をみずからに引き受ける決意に至るための、一プロセスとしての

意味をしかもたない。

人間の生命が引き裂かれているその様子を、もう少し詳しく見てゆきたい。

人間の生命が引き裂かれるのは、(1)「自己利益の本性」

「連なりの本性」、(2)「自己利益の本性」 「ささえの本性」、の二つの場面である。いずれの場面においても、「自己利益の本性」を満たそうとする方向と、それに対抗しようとする方向の、二つの方向へと人間は引き裂かれてゆく。これを図に表わすと、次のようになる。

連なりの本性

自己利益の本性

ささえの本性

A

B

つまり、人間の生命は、「自己利益の本性」を満たそうとするA方向と、それに逆らって対抗しようとする「連なりの本性」「ささえの本性」のB方向に、引き裂かれているのである。「自己利益の本性」が目指すA方向とまったく逆のベクトルを向いているという点では、「連なりの本性」と「ささえの本性」は同じである。「連なりの本性」と「ささえの本性」は、以前この連載でも指摘したような相違点があるのだが、「自己利益の本性」に対抗しようとするそのベクトルにかんじていえば、同じ方向を向いているわけだ。

人間の生命は、A方向とB方向に引き裂かれている。その具体的なあらわれについては、すでに自然保護、人工妊娠中絶、社会福祉などの場面で議論した。我々は、その引き裂かれの現場で、立ち止まってしまふ。

このA方向とB方向への引き裂かれは、現代社会をどのように運営していけばいいのかを考えると、きにもまた出現してくる。

科学技術と産業化がとめどなく進展し、テクノロジーがマイクロな生命に介入して生命倫理の問題を発生させ、環境問題や南北問題が先進工業諸国の文明に対して疑問を投げかけ、強者と弱者が混在する社会をどのように運営していけばいいのかが緊急の課題となつて浮上してきている現代社会。そこでは、また、我々の欲望の追求を基本的には肯定してきた現代文明のあり方それ自体も、問われはじめている。

それらの社会問題にどのような方向性をもつて解決を与えてゆけばよいのかを考えると、そこにもまたこの二つの方向の道筋がたちあらわれてくる。ひとつは、A方向、すなわち「自己利益の本性」の満足をまず第一に優先させるような方向性であり、もうひとつは、B方向、すなわち「連なりの本性」「ささえの本性」の満足をできるだけ優先させるような方向性である。

その二つの方向性を、簡単に定式化しておこう。

A 自分たちの自己防衛、自己生存、苦痛の除去、快適さの追求などを最優先に考え、欲望を肯定し、それを可能にするような「生命」と「自然」と「社会」の管理をすすめてゆく。

そしてそのために役立つ限りにおいて、自然保護や社会福祉を計画する。

B 自己利益、快適さ、エゴイズム、欲望の追求などをなるべく押さえ、自然と調和して暮らし、すべての人々がささえあい、定常的で差別の少ない社会を作り上げてゆく。与えられた条件や環境の制約なかで、多くの人々が真に満ち足りた生を送れるようにする。

矛盾と欲望と苦しみが渦巻く我々の社会を、どうしていけばいいのかを考えると、この二つの方向性がかならず出てくる。そしてそのどちらの方向性も、ある一定の説得力をもつ。なぜなら、それらの背後には、我々の生命の奥底に刻み込まれた三つの本性が存在するからである。

本連載の冒頭で述べた、自然保護の場面における「保全」と「保存」の対立や、社会福祉の場面における「利己主義の援助思想」と「利他主義の援助思想」の対立は、このA方向とB方向に引き裂かれた我々自身の生命の絶対矛盾を反映しているのである。それだけではなく、この二方向への引き裂かれは、他の場面でもたくさん見られるのではないだろうか。たとえば、新聞を開くと、浪費型文明を反省し環境問題を解決するために省エネにはげまなければならぬという記事がある一方で、不況を打開して景気回

復を目指すための抜本的な政策が必要だという記事が載っている。この二つは矛盾する。景気が回復すれば工場はまたフル稼働しはじめるのだから、環境汚染はさらに広がり、浪費型文明は拡大するばかりであろう。しかしながら、我々は、この両方向への誘惑を、身体の底から理解できるはずである。

すなわち、工場の乱立によって自然が破壊され、空気がきたなくなり、動植物が絶滅していることを我が身の痛みとして感じる人は多いだろうし、モノがあふれて物質的には豊かになったとしても、それで我々の生がほんとうに充実しているかと問われると、疑問に感じる人は多いはずだ。とくに、最近の、満ち足りた少年少女による事件などを見聞きするにつけ、物質的な豊かさがほんとうに幸福をもたらしているのだろうか、という懷疑はふくらむばかりである。しかしながら、同時に、人間が自然の制約を突破して、欲しいものを製作し、飛行機で行きたいところに飛んで行き、見たことのないものを体験し、世界のおいしいものを食べ、遠くの人々と知り合いになり、そうやってみずからの可能性を最大限に開花させることによるこびを、我々はすでに知っている。街に人々がにぎわって、きらびやかな雰囲気を楽しみながら消費行動をすることのよろこびもまた、我々は知っている。自然を管理し、自分がしたいことをする幸福こそ、文明が我々にもたらし

たものである。それを捨て去ることができるだろうか。

我々は、この両方がわかるのだ。しかしながら、この二つは根底のところまで矛盾し、衝突する。それは原理的に調停不可能である。その矛盾の深淵を抱え込んだ我々は、生命の奥底において引き裂かれる。人間と自然の関係をどうすればいいのか、弱者を抱え込んだ社会をどう運営すればいいのか、肥大する科学技術をどのように受容していけばいいのか。そのような問題に直面するとき、A方向とB方向のあいだに立ち尽くして、その狭間で引き裂かれるしかないというのが、現代文明のなかで生存しなければならぬ人間の宿命なのである。それは、自然のただ中から、文明というものを自発的にたちあげてきた人間が抱え込まなくてはならない文明史的宿命である。この宿命は、人類が文明を開始した当初から抱え込んでいたのだが、近代化を経て、自然環境を改変するテクノロジーが急激に増大した現代文明において、もつとも鮮烈に浮上してきた。科学技術と産業化のトップに立つ先進工業国において人々がかかえはじめた、なんともいえない「焦燥感」や「不安」や「息苦しさ」は、文明の高度化に比例してじわじわと浮上してきた引き裂かれの宿命に対する、絶望にも似た生命のうめき声ではないのだろうか。

我々は、文明のなかで引き裂かれるしかない。引き裂かれぬ

ことを選択することはできない。選択できるのは、どのように引き裂かれるか という選択肢のみである。どのように引き裂かれるのかを、主体的に選択するということのみが、我々に残された倫理的決断である。

3 癒しブームの本当の意味

いま、「調和」や「癒し」などの重要性が提唱されている。しかし、それは最終的な解決にならないばかりか、逆に我々の目を閉ざさせる「目隠し構造」になる恐れがある。自然と人間の調和などと簡単に言う文化人が多いが、『生命観を問いなおす』(ちくま新書)でも述べたように、その言説は欺瞞に満ちている。それだけでなく、それは本連載で検討したような、人間の本性間のどうしようなもない対立と矛盾というものを正面から見据えていない。

「癒し」については、また別の見方もできるだろう。我々は引き裂かれているが、現実の生においては、なにかの具体的な選択をしなければならぬ。人間の生命の三つの本性のうちのどれかを、否応なく優先しなければならぬ場面にも遭遇する。そんな

ときに、たとえば「自己利益の本性」を優先するという選択をしたとしよう。しかしそのとき、その人は、自分自身の内側に存在する「連なりの本性」あるいは「ささえの本性」をぐっと抑圧したことになる。その人の生き方として、この場面では「自己利益の本性」を優先していくのだという選択をしたとき、その人は、残りの二つの本性にのっとり生きてゆきたいというもうひとつの自分を、こころの奥深くへと押し込めたことを意味する。しかし、そこで押し込められ、抑圧された残り二つの本性は、こころの底で生き続け、その人を暗闇から脅かす。その闇からのメッセーヂが、その人を、なんともいえない「いらだち」や「不安」に追い込んでいくのだ。

癒しとは、生きられなかったもうひとりの私と対面し、それを抱きしめ、存在を承認することによって、それと和解することである。引き裂かれ、こころの底へと押し込められた生命の本性もまた、そのような癒しを要求する。都市に住んで過疎地に帰ろうとしないエゴイスティックな人々が、どうして週末に自然の豊かな森や海に行こうとするのか。そしてそこで、癒しのような感覚を得るのか。その答えは、もう明白だ。その人たちには、都市を捨てる気持ちはない。でも、その人たちのこころの奥底には、「連なりの本性」が生き続けている。都市に住むことで呻き続けてい

る、「連なりの本性」がある。しかし、彼らは「連なりの本性」を優先させなかったのだ。彼らが、生きられなかった「連なりの本性」にしてあげられることは、癒しのみである。

ほんとうは自然の豊かな過疎地に住む気はないのに、あたかも自然に包まれることが好きなのだというふりを見せることによつて、「連なりの本性」に一瞬の架空満足を与え、そして「連なりの本性」の存在を肯定し、承認してあげるのである。それは、たしかに欺瞞だ。しかし、その欺瞞も、「連なりの本性」にとつては、ないよりはましなのだ。都市から離れる気のない自然愛好家にとつての自然体験とは、この意味での欺瞞に満ちた癒しにほかならない。

そしてまた、このことは、現代においてなぜ「癒し」がブームになっているのかを説明する。それは、ひとつには我々が現代文明のなかではげしく引き裂かれているからであり、もうひとつには、我々がいまの自分というものを根底から変えようとする勇氣をもたず、楽をして目先の解決を得ようとするからである。もちろん「癒し」にはさまざまな側面とメカニズムがあるが、ここで述べたこともまた無視できない論点であると私は思う。その意味で、いまほんとうに大事なのは、「癒しの時代を開く」ことではなくて、「癒しの次の時代を開く」ことなのだ。癒しはある。そ

による解決は、多くのしこりと不全感をもたらすことになるだろう。

実は、我々には、もうひとつの戦略、すなわち衝突をあらかじめ回避するという選択肢が残されている。生命の本性はいつでもかならず衝突するわけではない。あるときには衝突するが、あるときには歩みをとにもすることもある。だとすれば、生命の本性が衝突しそうになったときに、その衝突を巧妙に回避していく戦略というものがあり得るはずだ。これは、根本的解決にはまったくならないのだが、しかし現実的な方策としては具体性がある。

たとえば、人工妊娠中絶をするのかしないのかという場面で、三つの生命の本性が複雑に衝突することは以前にも見た。そこでいかなる決断をしようとも、妊娠した女性のなかの本性の衝突と抑圧は、彼女に大きなトラウマをもたらすことだろう。したがって、このような衝突を回避するためには、そもそも人工妊娠中絶をしなくてもよいような社会を作り上げてゆくことがひとつの選択肢となる。具体的には、性教育と避妊の徹底、安全な受精・着床回避薬の開発、胎児治療の進展、障害者が住みやすい社会作り、望まれない妊娠で生まれた子を社会全体で面倒を見ていく仕組みの開発などをすすめることで、妊娠した女性が人工妊娠中絶をしなくてもよいような社会に変えてゆくことはできる。そのような

方向へと社会が変化すれば、人工妊娠中絶の場面で、三つの本性がはげしく衝突して我々を引き裂くということが、より少なくなるであろう。

これはたしかに、本性のあいだの衝突を調停するためのひとつの方法ではある。人工妊娠中絶の場面以外でも、同じようなことが考えられる。だが、ここで生じてくる大きな疑問は、本性のあいだの衝突を回避する方向で行為の決断をしたり、政策の選択をすることがほんとうに望ましいのかということである。我々の生命は本性レベルで引き裂かれているのだから、その引き裂かれに直面する機会を極力減らして、引き裂かれる痛みを最小限に食い止めるのがよい、という発想に乗ってしまっただけではたしてよいのか。そのような発想こそが、「我々の生命は引き裂かれている」という本質から我々の目をそらすための目隠し構造となっていくのではないか。引き裂かれるのがいやだから引き裂かれる場面を減らす、そうというのではなく、引き裂かれることは運命なのだから、いかにその引き裂かれを受け止めればいいのか、というふうに考えてゆくのが本筋ではないのだろうか。

ここはとても難しい問題を含んでいる。私は、人工妊娠中絶に直面する場面を少なくすることそれ自体を望ましくないと断言したのではない。そうではなくて、「本性のあいだの衝突に直面する

のがいやだから人工妊娠中絶に直面する場面は少なくなつたほうがよい」という考え方はほんとうにそれでいいのか、と言つたのである。矛盾や引き裂かれを回避しようとする思想が優越していくことではなく、矛盾や引き裂かれに直面してそれを受け止め、そこから自己を変容させて、さらに先へと扉を開いてゆく思想が生まれてくることのほうが大事なのだと私は思うのだ。

引き裂かれが生じてしまう場面を回避することそれ自体は、おそらく悪いことではないのだろうし、深刻な社会問題を解決に向かわせるためには、堅実なひとつの方向性になるにちがいない。しかしながら、引き裂かれるのがいやだからそうなるかもしれない場面を予防的に次々と消去していくという思想と行動は、我々を別種の畏へと追い込んでいくことだろう。その畏とは何か。次号から始まる新たな連載で、それについて根本的に考えてゆきたい。

いずれにせよ、我々が現代文明のなかで引き裂かれるしかないのならば、我々はどのように引き裂かれるべきなのかについて、目をそらさずに考えてゆかねばならない。

では、それは、どのようなあり方か。

私はこんなふうに思う。私たちがふたつの方向に引き裂かれていて、それでもなおひとつの方向を優先する選択をしなければな

らないとする。そのとき、私たちはどちらかの道を選択する。しかし、その選んだ道を進みながらも、自分が乗っている選択肢の諸前提はほんとうに正しいのかとつねに疑い、この道が正しいと思っただ自分とは何者なのかをつねに掘り下げ、そうすることによって、自分が乗っている道筋をたえず不安定で、敏感で、壊れやすく変更可能な状態にしておくこと。そのようなあり方が大事なのではないだろうか。そして、選択されなかったもう一方の道筋を、癒しによって単になくさめるのではなく、いまの自分の道筋が根底から揺らいだときに、いつでももう一方の道筋が再起動可能な状態にしておくこと。これを、私という個人の生き方として考えたいと同時に、現代文明のなかで社会を運営してゆくときにもまた提案したい。

ただし、A方向を選択したときと、B方向を選択したときでは、引き裂かれに対する態度は異なってくるように思われる。A方向を選択した場合は、自分の利益を優先させるという判断を行なうわけだが、そのときには、「自分の利益」と考えられているものが、真の意味で自分のためになることなのかどうかについて、たえず自問し続ける必要がある。これに対して、B方向を選択した場合は、自分以外のものとのつながりやささえあいを優先させるわけだが、そのときにはその選択によって自分の生がほんとうに

生き生きするのかどうかを、つねに測定する必要がある。

たとえば、開発か保護かという岐路に立たされて、開発の選択を行なったとする。このとき私たちは、A方向の「自己利益の本性」を優先させる選択をしたわけである。しかしながら、人間が自分の利益を優先することは当然だよ、というふうに開き直ってはいけない。自分の利益というときの「自分」とはいつたい誰なのか、利益と言うがそれはどのような意味で「私たちのため」になっっているのか、その「利益」というのは私たちの「充足」や「幸せ」を導くようなものなのか。そういったことをたえず問い続けること。あるいはその場面で自分の利益という選択肢を選んでしまった「自分」とはいつたい何者なのか、そのような選択をすることで自分は何を獲得し、何を失ったのか、そのような選択をする自分の生とは何なのか。そういったことをたえず問い続けること。そうやって、いつも開き直りとは正反対の位置にみずから置いて、自分が選択しなかったものごとに対していつも敏感に、自分を開いていること。そして、自分たちの利益だと思っていたものが、実は自分たちのためにならないかもしれないと分かったときには、いつでもその道を撤退する勇気を持つことが必要だ。

これに対して、もし保護の選択を行なったとする。このとき私たちはB方向の「連なりの本性」を優先させる選択をしたわけで

ある。それはそれで立派な判断なのであるが、しかしながらそのような選択を続けることが、ほんとうに我々の生の可能性を縮減させず、生き生きとさせているのか、それをいつも測定し続けなるといけない。我慢を続けることで、実はのびやかに展開するはずの生命の力をそぎおとしているのではないか。お互いに抜け駆けしないように監視することによって、逆に生を抑圧するリゴリズムに陥りはしないか。少々他を犠牲にしたとしても、この私によって生き生きとするのならば、その生き生きとした私に影響されて他の存在もまた生き生きし始める、という道筋を過度に禁止しているのではないか。そういう問いかけを忘れてはならない。

いちばん危険なのは、自分の利益を後回しにする選択をみずからに課しているうちに、「おれたちも苦しんでいるのだから、おまえたちも苦しめ」という形の抑圧を外部に強圧的に振り向けてくることだ。それが、環境や共同体や国家などの名前を借りて発動される危険性は、いつでも開いている。B方向を選択することによって、自分たちが生き生きとせず、そのいらだちをもって他を制圧しようとするのは最悪の道筋だ。そのときには、いさぎよく自分の小さな欲望を肯定してみる大胆さを持つてほしい。

同じことは、困っている人や弱者を助けるかどうかという社会

福祉の場面でも言える。A方向のエゴイズムを選択するにせよ、B方向のささえあいのみずからに課すにせよ、それぞれ同様のことを自覚しておかなければならない。

このような形で私は引き裂かれていたい。これが、暫定的な結論である。

しかし、このような状態に身を置くということは、自分自身をたえざる不安にさらすことである。自分が選んだ選択肢が、ひよとしたら間違いかもしれないという疑念にさいなまれ続ける危険性はないのか。それによって、自分の決断を自己肯定できず、自己否定とニヒリズムへと堕ちてしまうのではないか。それを回避するために、結局は開き直りをして目を閉ざしてしまったり、安心できるなにかの権威にすがったりすることにならないか。

そのような疑問が生じてくることだろう。それへの答えは、結局のところ、私が『宗教なき時代を生きるために』(法蔵館)で述べた第三の道、すなわち宗教でも科学でもない、ひとりひとりが自分に向かって走り続けるプロセスをお互いに遠くからささえあうような道が可能かどうかにかかってくる。私は生命学という可能性を、その方向に向けて開いていきたいのだ。

この連載「引き裂かれた生命」は、今回で終わる。人間の生命には三つの本性が刻み込まれているということ、我々は生命の根底でふたつの方向に引き裂かれているということ、そして我々は現代文明のなかでどのように引き裂かれればよいのかを、みずからで決定しなければならぬということ。それが、長かった足掛け四年間の連載の結論である。語り残したことはまだたくさんある。いまから振り返ってみれば、深まっていけない記述がいやになるほど多い。従って、この連載をこのまま書物にすることはしない。どのくらい先になるか分からないが、もう一度完全に書き直して、将来の生命学シリーズに収めようと思っている。ただ、「連年の本性」「自己利益の本性」「ささえの本性」の三つの本性によって人間の生命をとらえるという考え方は、すでに幾人かの論者によって言及されはじめている。当分のあいだは、この『仏教』の連載をもって、人間の生命の本性論の定版としておきたい。

思い起こせば、この連載をはじめた年は、あのオウム真理教事件がおきた年でもあった。そのあとも、オウムがあからさまにしたこの社会の病理は、神戸の少年殺害事件へと受け継がれ、いま

やキレる少年たちや、援助交際という自傷行為へと駆り立てられる少女たちが、ちょうど我々の社会を映す鏡のようにまとまって出現しはじめている。これらに加えて、学校のなかでのいじめ、不登校、引きこもり、摂食障害などを重ね合わせると、そこには我々の現代文明の輪郭がおぼろげながら、しかし疑いなき姿をもつて表われ出ていることがわかるのだ。

二一世紀を目前に控えたいまの日本社会は、先進工業国がこれから共通してかかえこまなくてはならない病理のある一面を、極端な形でもっとも明瞭に体现しはじめていると私は感じる。ある意味では、日本社会は文明の先頭を走っている。もはやどこにもそのモデルはない。村上龍は、近代化の終焉という言い方でそれをとらえようとしている。宮台真司は、社会全体の学校化という見方でそれを感じとろうとする。彼らのとらえ方の大きな方向性は間違っていないと思う。ただ、この問題をとらえるのには、やはり現代文明全体の構造を視野に入れる必要がある。とくに、現代文明がそのテクノロジーの側面においてなにを達成しようとしているのか、そしてそのことによって我々の「生命」がどこにむかって追いつめられようとしているのか、そこを掘り下げない限り本質は見えてこない。

衝動的暴力、援助交際、拒食症、恋愛病、これらは逸脱行動の

問題というよりもむしろ、現代文明のただ中における生命の問題なのだ。「引き裂かれた生命」を書き続けながら、私の関心は同時代を彩るこれらのできごとに引きつけられていった。これらは、同時代評論の対象物ではない。これらは、真の意味での文明論の対象物なのだ。私が並行してすすめてきた生命倫理の問題が、これらのできごとと交差する。生命の誕生の現場で、いま静かに進んでいるミクロな生命管理。徹底的に清潔な形で生命の質を選別し、いらぬ生命は目に見えないほど小さなきに捨てられる。そのように管理され、選別されて誕生する生命の姿と、この社会全体を覆い尽くしているなんとも言えない「息苦しさ」は、とことん似ているのではないか。

「引き裂かれた生命」では、管理テクノロジーと文明のダイナミズムについて深く考えることができなかつた。次回からの集中連載では、このような視点から、現代文明とそのなかにおける生命の姿を徹底的に掘り下げる。そこでは生命倫理だけではなく、学校化・管理化される現代社会のなかでおきている様々な問題を、お互いに通底するものとしてとらえなおすことになるだろう。現代文明を根底から切り取る大きな仮説を提出する。次号からの集中連載を期待してほしい。

* 「引き裂かれた生命」は本号で終了です。長い間ありがとうございました。なお、生命学に関連する私の論文やエッセイを「生命学ホームページ」にて全文公開しています。
(<http://member.nifty.ne.jp/lifestudies/>)°

あとがき

「引き裂かれた生命」を『仏教』誌に連載したのは、一九九五年から一九九八年のことである。季刊誌だったから、年に四回、書き続けなければならなかった。一九九五年といえば、オウム真理教事件が起きた年だ。その夏には、後に本の第一章となる原稿「宗教なき時代を生きるために」一〇〇枚を、『仏教』臨時増刊号に書いた。この年の後半は、この連載と、『宗教なき時代を生きるために』の執筆というハードな作業を続けていたわけだ。

連載の後半になって、私は「引き裂かれた生命」という枠組みに小さな疑問を感じ始めていたように思う。なぜなら、そこにあるのは静的な緊張関係だけであり、生命が生命を力づけたり抑圧したりするダイナミズムを表現し切れていないように思ったからだ。その疑問はしだいに大きくなった。そして、「引き裂かれた生命」というものを、現代文明の大きな流れのもとにダイナミックに位置づけて考えなければならぬのではないかと思うようになった。

こうやって、「引き裂かれた生命」は、その終了直後に連載が開始される「無痛文明論」へとしだいにシフトしていくのである。

「引き裂かれた生命」の最終回は、「無痛文明論」への序章でもある。この二つの作品には、密接な関連性がある。「引き裂かれた生命」がなければ、「無痛文明論」も書かれることはなかったはずだ。この意味で、「引き裂かれた生命」は、『宗教なき時代を生きるために』と『無痛文明論』をつなぐ、一本の深海流であったと言える。

「引き裂かれた生命」で提唱された「人間の生命の三つの本性」は、生命・自然・文明の関係を考えるうえで、欠かすことのできないアイデアである。この連載では、三つの本性について、十分に掘り下げることができなかった。甘い記述や、誤解を招く表現もたくさんある。将来、『無痛文明論』を刊行したのちに、あらためて書きなおすつもりである。その際には、もっと大きな枠組みのなかにこの議論を置いてみたい。それまでは、この連載が、生命の三つの本性論についての決定版となるであろう。

森岡正博全集版に収めるにあたって、本文には一切手を加えなかった。

二〇〇一年四月一日

初出一覽

第一章	『仏教』三三号	一九九五年一〇月	三五〜五〇頁
第二章	『仏教』三四号	一九九六年一月	五八〜七〇頁
第三章	『仏教』三五号	一九九六年四月	一〇三〜一二〇頁
第四章	『仏教』三六号	一九九六年七月	六七〜八〇頁
第五章	『仏教』三七号	一九九六年一〇月	一五三〜一六四頁
第六章	『仏教』三八号	一九九七年一月	二二六〜二二七頁
第七章	『仏教』三九号	一九九七年五月	一四七〜一五八頁
第八章	『仏教』四〇号	一九九七年八月	一七一〜一八四頁
第九章	『仏教』四一号	一九九七年一〇月	一二三〜一三六頁
第一〇章	『仏教』四二号	一九九八年一月	五二〜六四頁
第十一章	『仏教』四三号	一九九八年四月	九六〜一〇八頁